

子ども学の源流を次世代につなぐ

幼児の教育

〔特集〕 問い直そう、保育の中のあたりまえのこと
「子どもは元気」がいいのか？

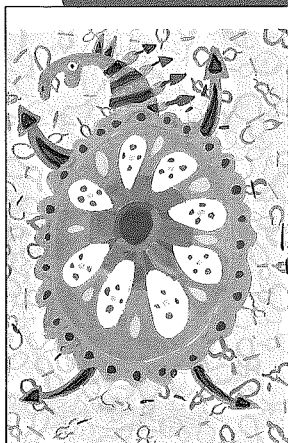
〔シリーズ〕 子どもが育つ場所を訪ねて
函館市 遺愛幼稚園

〔新企画〕 実践研究
私の保育ノートから

春 2012

since 1901

実践事例を ていねいに読み解く！



「気になる子」? その姿から考える
 かかわり事例集

石井哲夫・著
 社会福祉法人 葛城福祉会 杉山勝徳顧問・協力

石井勉夫・著
社会福祉法人 高松福祉会 村山中務蔵首圖・協力

Point ①

本書を通じて

子どものかかわりが見えてきます！

Point ②

本書を通じて

**園外との連携が
見えてきます！**

Point ③

本書を通じて

**体制の整え方が
見えてきます！**

圖：市川浩志

「気になる子」？ その姿から考える かかわり事例集

石井哲夫／著

社会福祉法人高原福祉会 村山中藤保育園／協力
(法人理事長 高橋保子先生が読売教育賞 受賞)

定価1,890円(税込)

25.7×18.2cm 120ページ

10928

こんな事例に心あたりはありませんか？

- 叱られることが多いRちゃん 4 歳 女児
 - 着替えのできないEちゃん 4 歳 女児
 - 人とかかわるのが苦手なSちゃん 3 歳 女児
 - お遊戯会に参加したTくん 4 歳 男児
- 保育者をどうサポートするか
- 子ども家庭支援センターとの連携

対談 石井哲夫 × 野田聖子

(衆議院議員)

『子どもを育てるということ』

『ハンディキャップをもつ子どもの親として』を掲載

「発達障害者支援法」の産みの母、野田聖子議員が、一人の子の親として、一人の議員として考えたことを語ります。

実際に園から寄せられた事例と対応例を紹介

事例紹介 第2章 事例3から

「着替えのできないEちゃん」

(4歳・女児)

[illegible]

● 保育者の悩み ●

「着替えに時間がかかる。
ボタンを見てくれない」という悩みが。

● 対応例 (かかわりの特徴 など) ●

「ボタンをもつことができない」のか、それとも、
「ボタンをボタン穴に入れられない」のか。
何ができないのか理解する。

子どもの姿に変化が！

著者・石井哲夫による
解説や事例から派生した
疑問に答える Q&A など
読み応え十分！



園：ヤマタカマキニ

子どものまなざしの向こうに

目に見えて写っているものの向こうに、
見る者の心に映るもうひとつの子どもの世界が
聞こえてこないでしょうか。



「いたよ！」
「どこ？」
「ほら、あそこ」

目次

表紙の図柄は、お茶の水女子大学附属幼稚園内にある
ステンドグラスの模様をデザイン化したものです。

【写真】

子どものまなざしの向こうに ————— 1

【目次 プロローグ】

編集とそよ風 浜口順子 ————— 2

【特集】

問い直そう、保育の中のあたりまえのこと 5

「子どもは元気」がいいのか？

インタビュー 渡辺久子氏（聞き手）ダーリンブル親子 ————— 4

私はこう考える 幼稚園の中にある「元気な子ども信仰」 徳田克己 ————— 13

子どもの元気を再考する

—「子どもらしさ」というイメージの中で— 磯部裕子 ————— 17

「元気」に思う、いろいろなこと 渡邊満美 ————— 21

【シリーズ】

子どもが育つ場所を訪ねて

遺愛幼稚園 上坂元絵里 ————— 24

【実践研究】

私の保育ノートから

おもちゃの取り扱いから考えたこと

—過去の記録から学び直す— 川島明希子 ————— 30

子どもの目線になって見えたもの 川辺尚子 ————— 36

【保育エッセイ】

続・心が育つということ

「意思」を育てる 豊田一秀 ————— 42

【からだ考】

食べる つながる 育つ

命を学ぶ食農保育（1） 命の保育をデザインする 倉田 新 ————— 46

幼児の教育 春 2012

第111巻 第2号

子ども学探訪

編輯顧問 倉橋惣三とキンダーブック

「乗物の巻」を読む 浜口順子 50

報告

「いのちはみんなつながっている ～知識より知恵を」

本橋成一氏（映画「ナージャの村」監督）講演 菊地知子 56

保育におけるリーダーシップ論 井上知香 62

アーカイブス

幼児の教育110年の散策

阪神淡路大震災関連の記事から

—第96巻第1号（1997年1月）より— 菊地知子 67

子ども学のひろば

学会 研修会情報・読者投稿・エピローグ 他 71

プロローグ 編集とそよ風 浜口順子

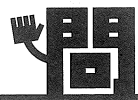
東日本大震災から一年。この冬は気温以上の厳しい寒さを感じた。春の風は、被災地の子どもの頬にやさしくあたっているだろうか。

『幼児の教育』が季刊となりやはり一年、二度目の春号をお届けできる幸せを感じる。編集とは、人々の文章を集め糸で綴じて本にすること。私たち編集スタッフも及ばずながら、一つひとつの原稿をいかに集め綴じようか、豊かな伝達場が生まれるようにと試行錯誤してきた。倉橋惣三が初めてこの雑誌の編集主幹になったのがちょうど100年前。当時は「編輯」の字を使う。

「編輯」も「編集」も意味は同じだが、「輯」はクルマ偏、たくさんの材料を集めて輿（のりもの）を作る意だという。「集」はその形どおり、木の上にたくさんの鳥たちが集まり群がっている図。「あつめる」という意味は共通だが、「輯」には集めたものを運ぼうとする動力が感じられる。今号から、倉橋の編輯した観察絵本が運びわたったものは何か考えていく。

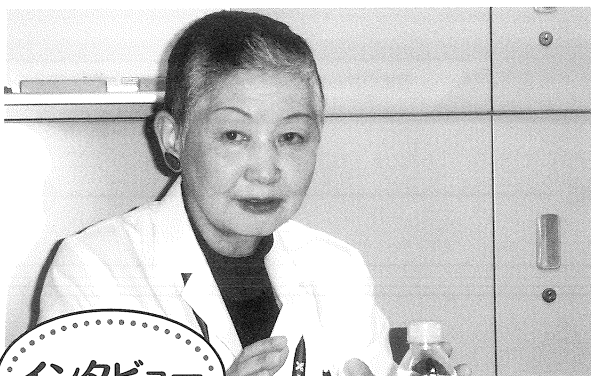
さて、「輯々」という言葉があるそうだ。風が和らぎそよそよと吹く様子を表す。寒さの中で硬くなった心をほぐすような雑誌を届けられたらと願う。

特集



い直そう、保育の中のあたりまえのことら

「子どもは元気」がいいのか？



インタビュー

わたなべ ひさこ
渡辺久子氏

慶應病院小児科医。

世界乳幼児精神保健学会日本組織委員会会長。思春期やせ症、被虐待児、自閉症、PTSD（心的外傷後ストレス障害）などの子どもたちを治療的に支援している。

「問い直そう」の特集シリーズ、ご好評いただいております。二年目も引き続き「保育の中のあたりまえ」について取り上げてまいりますので、よろしく願います。

今回のテーマは「元気」です。「子どもは元気なもの」という風潮、ないでしょうか。巻頭インタビューでは、病気の子どもと深くかかわってこられた精神科医の渡辺久子先生にお話を伺います。聞き手は、臨床的子ども理解を研究されてきたダーリンプル先生です。その後の「私はこう考える」コーナーでは三人の方々に「元気」論をいただきました。常識に風穴をあけたいものです。

（編集委員会）

聞き手 ダーリンプル規子

（中部学院大学短期大学部幼児教育学科専任講師）

ダーリンブル こんにちは。今日は、慶應義塾大学小児科学教室でさまざまな年齢の子どもたちを診てこられた渡辺久子先生に、まず先生が「子どもの元気」をどのように考えていらっしゃるかを伺いたいと思います。

自然な子どもの元気

渡辺 そうですね、戦後のベビーブーム時代の私たちのほったらかされていたあの自然な子どもの元気でしょうか。自然な子どもの元気というのは、誰かに見られている、にらまれている、期待されている、監視されているということ抜きに、子どもが自由に、その空間を安全な場所だと思い、そこが大好きな場所になる。そしてそこに集まってくる友達、仲間をいいものだと思いながら、その子どもも集団の遊びを自由に展開している時の元気さということです。

私、日本の育児についてい苦言を呈してしまうのですが、育児になると日本の私たち大人は、大変熱心になってそして親御さんにもいいふうには伝えよう

と、思っていて、それはいいこととも思うのですが、子どもたちが大人の思いや情報の先にある「これが元気な子ども」と勝手に規定したものの中に当てはめられていく、そのような元気というのはやめたほうがいいと思うんです。子どもは元気な時と元気じゃない時があるから。乳児や、発達の遅れや障害や偏りのあるお子さんたち、私はそういうお子さんたちの診療が大好きだけれど、彼らは普通の子どもの発達のコマ落としたみたいな感じで、普通の子どもが、ぱっと通過するところを、ゆっくりゆっくり通過して、く。その子たちをよく見ていると、何か夢中に元気にやった後、必ずしばらく、ぼーっとして、一見元気がない時間がある。その時間には何をしているかというと、余韻を楽しんでいた、プロセスを感じていたりして、ぐっと内向することによって体験を自分のものにしようとしている。だから子どもは元気な時があれば元気じゃない時が必ずある。交互にやっていくというすごくダイナミックな展開を子どもが喜んで自然にやっているという流れ、それが



いいんだと思います。

ダーリンブル そうですね。

渡辺 少子化で子どもたちが大事になってきたのはいいけれど、その自然さの中の元気さ、これが本当に少ない。

一歳半の「NO!」は元気な証拠

渡辺 たとえば公園に行くと、一歳半の子どもに「まりちゃん、けんちゃんが欲しがっているわよ。あげたら?」という感じになる。マールーあるいはスピッツも言っているけれど、一歳半の「NO」つまり、「いや」というのは、いわゆる本当に元気な証拠です。子どもが自分が主体になって生きている時にすぐ典型的なのが一歳半の「NO」だとスピッツは言った。「NO」と言った時にそれは何かというと、存在をかけて、私自身、僕自身が大事にしたものだから、このおもちゃと一緒に今、遊ぶのが私の元気で幸せだから絶対に嫌なんだ、と言っているんだと思う。そこに大人が「あげなさい」「二人で仲良く元

気に遊びなさい」と言ってしまう。それは、母親が息子に対して「あなたのガールフレンドをあなたの親友に一晚貸してあげたら?」と言うくらい、すごく変な話。つまり子どもの自己存在の尊厳とか主体性とかがからめとられて、親の仕切る発達や育児にのせられているということなんだろうと思う。鈍い子は「嫌だ」と言って終わるし、お母さんが恥かしい、終わりなんだけれど、少しデリカシーの豊かな子は、やっぱりふつとなびく。それが危ない。

自分自身らしくいることが元気

渡辺 そういう意味では、私自身は戦後のベビーブームにいて、そしてもしかすると環境はそんなに安全じゃなかったかもしれないけれど、近所の子どもたちと、少なくともお日様が出ている間は走りまわって、遊びまわって、チャンバラごっこあり……。そういうことができて、今になってみると何て豪快な世界だったと思う。トム・ソーヤーの冒険みたいな世界。つまり単純に子どもの世界だった。



▲渡辺久子氏

渡辺 すごく大事な視点だと思う。結局保育者、親、あるいは私たち心の専門家は、それに基づいて子どもを語りがちだからね。でも、それは一

ダーリンブル では、いったい全体、保育者とか大人が抱いている子どもの元気さというのは何なのでしょうか。

響き合いの中で育まれる

子どもの輝いている時間の中で、本当に遊びを見つかったり、見つけれなくて悔しがったり、うまく友達と何かやろうと思ったたら大げんかになっちゃったり。何でもいいんだけど手応えのある体験の中で、力抜いて本当に生き生きというか、本当に出し切っていて、腹の底から悔しがったり、笑ったり、考えているという、そういうのが元気だと思う。

ダーリンブル 子どもが自分自身らしくいることが元気ということですね。

人ひとり違うんだと思う。一人ひとりの子ども時代の豊かな体験がその人の身体の中にあって、身体記憶として身体の奥で、ちようど心の井戸みたいだね、それを照らしていると思う。

たとえば、私は年子の兄弟がいたために、日々朝から晩まで普通の家でごろごろしていて、そうしながら子ども同士がつつき合う。四六時中そうで私は煩わしくて、何とか逃れたいと思ったけれど、でもそれが逆に、最近スターンなどが言っている、人の子は人のオーケストラの中に必然的に入って、その音色を聞かされながらその音色に合わせてやっていくんだということだった。子ども同士のもまれるというものが、やはり目に見えないけれどすごく大事だったということなのです。

ダーリンブル 元気はその子ども自身の中から出てくるものでもあるけれど、響き合いの中で出てくるものでもあって、それがもまれていく中で育っていく、そんな元気が大事だと。一方で大人の視点からの「元気」だと、その子は一見元気に見えるけれ

ど、本当は嘘の元氣になってしまおう？

渡辺 そういうリスクが高い。決めつけることはいいけないけどね。

ダーリンプル もちろんそうですね。先生はいっぱい思春期の方たちを見ていらっしやいますけれど、ある時期にそれが心の病として発現してくる。

渡辺 その時ね、親御さんたちはものすごく仰天するわけ。だって見るからにいい子たちだから。その時にすごく興味深いのは、「あなたの幼稚園・小学校の時の思い出はどう？」と聞いたたら「全然思い出さない」と多くの子どもが答えるということ。印象に残らないということは、喜びになっていないという可能性か、苦痛だったから閉じ込めているのかもしれない。つまり、この子は本当に遊んでいましたよと親たちが言うにもかかわらず、結局バフォーマンズとしての元氣だった。だからいつもにつこり笑って、いつも張り切ってやって、大人主導で遊びましようと言ったら遊んでいたけれど、楽しくなかった。

脳の発達の原点から元氣を考える

渡辺 一つね、子どもの元氣と言った時に、子どもの脳の発達の原点からちよつと考えてみようと思う。たとえば、いよいよ子どもが自力で動きだすのは、はいはいする時。はいはいは子どもの初めてのロコモーション。ロコモーションという英語は車とか交通とかいろいろいわれているんだけど、厳密な小児神経内科の定義は、自ら自分の意思・意欲で動くということ。それは御茶ノ水の駅前にある瀬川クリニックの国際的な小児神経科の瀬川昌也先生が皆に繰り返し言っていることです。乳児のロコモーションが発現するためには、その子の周りに安全な広がりが必要だけれど、最近の住宅事情ではその確保も難しく、最初のロコモーション、つまりはいはいが最初に始まらなかった子どもたちの中には脳の発達不全を起こして、いわゆる自閉症のような状態になっている子どももいるといえます。自閉症というのは三十年前には一万人に45人、今は千人に45人とい



われていますが、三十年間で人間の脳がそんなに変わるわけがない。となると環境要因ですね。だから瀬川先生が、脳の発達に果たす環境の役割を見直そうと言われています。生まれつきの親からの遺伝子とか、胎内のいろいろな環境要因もあるかもしれないけれど、生まれ落ちた時に人間の脳は、半分も回路が出来ていない。三分の一くらいともいわれ、子ども自身の体験からいろいろな脳がつくられていく側面がむしろ絶大なわけです。また、室内を手前からあちらまではいはいしていく時に、子どもは、こちらの角度から見た部屋と、目標の近くで見た景色とを統合するというプロセスを同時にやっている。だからロコモーションでは、その子たちが自らの意図で動く中で、はいはいの機能が発達して脳が発達するけれど、それは単なる運動系が発達するのではなく、立体感とか物事をいろいろな角度から感じ取るダイナミックな認知力も全部発達するといわれている。それが一つ。

もう一つは、たとえばお日様が出て日があたって

いる時に遊んで、暗くなったら寝ると一日のパターンのこと。赤ちゃんは最初の一か月間は昏々と寝ているけれど、外の光に触発されて昼間起きて夜寝るといふうにだんだんなってくる。昼間はアドレナリンが出て交感神経が活動し、夜は副交感神経というリズムが生まれてくる。そのような生活に赤ちゃんが順応してきたことを表す一つの指標は、四か月にお昼寝と夜の寝方の区別がはっきりとすることなの。その識別ができない、時差ボケであったりこっち連れていかれたりした子どもたちの脳は不利な環境に陥るといわれているのね。つまり、自ら動くロコモーションの元気と、自然な太陽系の昼間活動して夜寝るリズムの中の元気ということですね。そしてその上で、太陽の下での砂と泥と水の生活と遊びがすごく大事だと思う。たとえば、私の子どもが通っていた「ぼーぼー子どもの家」という保育園では年長児たちに海辺で水遊びをする機会が与えられていました。子どもたちは波や風を相手にして、砂をわあっと走り大満足していました。生きる

底力を持つスケールの大きい子をつくりたいと思つたら、子どもが元気に、これと同じくらいのスケールの大きい遊びを体験させる努力が大人に必要なですね。

山梨大学の体育系の教授、中村和彦さんは福島県郡山市の子どもたちが、放射線被害のため外遊びが減り苦しむ姿を見て、子どもらしい遊びを取り戻すために、一緒にやっている人です。彼はオリンピックの金メダリストの子ども時代の遊びを全部聞いてまわった。その調査の結果、一人としておけいこ事に行っていない。皆ただただ遊んでいる。夢中になつて遊んでいる。その子ども時代に遊びの中で培つた意欲が、試合の中で金メダルの獲得につながっているのです。彼らは、最後はやっぱり自分が喜びとすることを自らやるんだという本物の意欲で、夢中に遊んだ時と同じ情熱でやり切っているのです。そういう生き方にまでつながる子どもの元気であり遊びであるという事実を掘り起こして、深い遊び論を展開する必要があると思う。子どもの元気に関するちゃんとしたアカデミックな保育論というのを、も

う一度展開する必要があると思うのね。

子どもの気質

ダーリンブル 先ほどの子どもたちの姿を聞いていて、私の息子の姿を思い出しながら心が痛くなりました。たとえば、



▲ダーリンブル親子氏

夏休み、彼の友達親子皆で近所の公園の浅いプールみたいな所に行こうということになって、息子は、仲間だから行ってもいいけど言いながら私と出かける。友達は本当にうれしそうに、ぱつと全部脱いで水着に着替えて、水鉄砲なんか持って走るわけです。ところがうちの息子は……。

渡辺 息子さん何歳？

ダーリンブル 今は六歳ですけど、四歳からずっとそんな感じなんですけど、そこに行つて「僕、入るのやっぱりやめようかな」と。「ちょっと他の人たちもいるから僕は嫌なんだ」と言つて、ずっと午前中は私たち大人と一緒に座っているわけです。そのうち

「やっぱり僕も入ろうかな」と言うところは、皆は飽きてきて、あがつてきたりするところなわけですよ。

私からすると、水を見た瞬間わあ入りたいというほうが子どもらしくて元気がいいという感じがあつて。

渡辺 それは先生とその子たちが似ているからよ。先生、ぱつと飛び上がっちゃうでしょ。

ダーリンブル 私、そうですね。

渡辺 私は息子さんのほうなのよ。スロー・トゥ・ウォームアップ。子どもには気質がある。有名なステラ・チエスのね、イージーチャイルド、デイフィカルトチャイルド、スロー・トゥ・ウォームアップ・チャイルド。スロー・トゥ・ウォームアップ・チャイルドは日本だと大人のひんしゅくを買うのよね。お母さんがいら立つ時に本当に不幸が始まるの。でもこのタイプの子どもは実はじっくり型で、すごく大物になるかもしれない。彼らを見ていると、本当にデリカシーが豊か。ものすごく興味があつた時によく見てはいるけれど、決して自分からは動かない。でも誰もいないところに置くと、それはつまり自分

の主体性がはつきりしている時に、ばあつと遊ぶ。

ダーリンブル 自分の中に、子どもというのはとか、子どもの元気というものが画一的にあつたんだと今、感じています。改めて、先生が一番初めに言われていた、一人ひとり違うのよという部分がすごく大事だと思います。元気という言葉は、健康でエネルギーがいっぱいあつて活動的で、というイメージがちよつとあるんだけど、でもそうじゃなくて息子みたいに、じっくりゆっくりだけど熟成させているというのも、元気と言つていいんですか。

渡辺 もちろんそう。自分から動いているということが大事だと思うのね。

お母さんたちへのメッセージ

編集部 最後に、今不安で仕方がなくて子どもを外に出したくないお母さんたちに何かメッセージをお願いします。

渡辺 育児で一番子どもが困るのは、お母さんが不安な時です。お母さんが不安な時というのは、子ども



もは生きた心地がしなくて遊べなくなってしまう。遊べないと脳が発達しない。心は絶対に成長しない。だから育児不安を取り除くというのは、一番大事な育児の原則です。今回の放射能被害に関係するさまざまな動きは、お母さんの不安をあおったんですね。私が若いお母さんの母親教室とかではつきり言うのは、どんな子どもが産まれてもみんな支え合って育てれば絶対に大丈夫、ということ。お母さんが不安になるのはわが子への愛情からなのであたりまえだから、もし障害のある子が産まれても、子どもがいなくていいところで思い切り泣いていいのよ。すっきりするまで泣きましょとお伝えします。どのお母さんもうがて静かな底力がわき、素晴らしく成熟されます。不安はタブーなんです、育児には。

編集部 不安は一番ダメだということがわかれば効果がありますか？

渡辺 郡山市にジョイ・オソフスキーという人が来て、彼女はニューオーリンズでカトリーナ台風で被災しているんですが、その時にまず一番にやったこ

とは、異常な事態の中に、ニューノーマルという新しいノーマルな空間を一所つくるということをしたそうです。たまたま郡山で私たちもそれをやっていました。私たちが三月二十一日に郡山に行った時、そこではボランティア三〇〇人がいて絵本の読み聞かせを今までやり続けて楽しんでいたと聞いたんです。それなら、絵本の読み聞かせをやらうとなった。

郡山で小児科をしている菊地信太郎先生が、この間のFOUR WINDS大会で言っていたんだけど、どんな不安の中でも子どもを幸せにしたいんだったら、大人は子どもを安心させるあらゆる努力をしなければいけないと言いました。だからお母さん、くれぐれも不安である時は誰かと話しましょう。不安な時には不安を調節しましょう。不安がゼロになるのは無理であってもまあまあ、鏡で見ているからいいかなとかね。

ダーリンプル それではこんなところで。先生、貴重なお話を本当にありがとうございます。

(平成二十三年十一月二十二日)

私はこう
考える

「子どもは
元気」が
いいのか？

幼稚園の中にある「元気な子ども信仰」

徳田克己

私は幼児期の親と子どもの心理的な問題を専門に研究・活動していますが、年間一、〇〇〇件以上ある相談の中には、「うちの子どもはいつも部屋の中で

絵本ばかり眺めていて、少しも元気がないんです」という親の訴えがあります。子どもが飛び回っていなければ何か問題を抱えているという見方をする親がいるのです。幼稚園への巡回活動の中でも、保育者から同じような相談を受けることがあります。

それでは「元気」とはいったいどういうことなのでしょう。幼児期の子どもは飛び回っていないければ問題があるのでしょうか。性格的におとなしいために、また病気や障害があるために、一見すると元気そうに見えない子どもたちがいます。その子たち

は本当に元気がない子どもなのでしょう。本稿ではそれらについて考えてみたいと思います。

幼稚園文化の中の「元気」

インターネットで幼稚園の教育目標を調べてみると、そこには、元気で仲良く、元気いっぱい、明るく元気に、元気でたくましく、健康で元気に、元気・勇気・根気などのように、「元気」という言葉がたくさん出てきます。

また、数年前に私が数百園の幼稚園歌の歌詞を分析した研究結果では、何と66%の園歌の歌詞の中に「元気」が登場しました。

昔から、外で走り回る子どもの姿を「元気な子ども

も」としてとらえ、身体が元気なことが好ましいと考える文化が日本の中にあつたからでしょう。いや、日本だけではなく世界のどの国でも同じかもしれない。私は子ども文化の研究のために、世界の六十余りの国・地域を回って絵本を調べてきましたが、雪、海、川の中で遊んでいる子どもの姿が、それぞれの文化の中で多く描かれています。

保育者の考える「元気」とは？

この原稿を書くにあたって、親しい若い保育者五十名ほどに、「子どもの元気をどうとらえているか」についての無記名の質問紙調査をしました。

その結果、「園庭で思いっきり身体を動かすことが大切だ」と考えている保育者が全体の88%もいることがわかりました。さらに「子どもは元気なことが一番」(90%)であり、また「幼稚園では元気に活動することが大切だ」(72%)ととらえている保育者が多いことがわかりました。一方、教室の中で絵本を読んでいることが多い子どものことを「元気が

ない」ので気になるという回答が68%もありました。やはり保育者は身体をたくさん動かすことが元気なことであるととらえる傾向があるんですね。しかし、興味深いのはADHD(注意欠陥多動性障害)のある子どもに見られるような動きの激しさを元気と感じる保育者は19%しかいなかったことです。目的のない衝動的な動きではなく、遊びの中の意味のある動きが元気な状態としてとらえられているのです。

身体の元気と心の元気

保育者に「身体の元気と心の元気は異なるか」を尋ねたところ、82%の保育者は「異なる」と答えました。しかし、中には、健康な身体にこそ健康な心が備わると考えている保育者もいて、園にいた間は少しでも身体を動かして運動発達を促すことが心を元気にする唯一の方法であると力説していましたが……。

身体が元気なことは、病気をしていない、けがをしていない、身体を自由に動かせる、よく寝ている、食欲がある、生活リズムが整っている状態であると

考えている保育者がほとんどでした。つまり、きちんと生活できている健康な子どもというイメージです。

一方、心が元気なこととは、笑顔でいること、気持ちよく切り替えられること（クヨクヨしないこと）、お友達と仲良くできること、表情が明るいこと、自分の気持ちを素直に表現できること、いろいろなことに興味を持つていること、心が満たされていること、他者に対する思いやりがあることなど、回答が多岐にわたっています。無理にまとめてみれば、子どもが、明るく、気持ちが安定していて、いろいろなことに積極的であることを指しているといえるでしょう。

病気や障害のある子どもの元気とは

右に述べたように、身体の元気と心の元気を分けて考えるならば、身体が自由に動かない病気や障害がある子ども、心が元気な状態であれば「元気な子ども」であると考えることができます。

今回の質問紙調査では、身体の元気と心の元気を区別して保育者に尋ねたために、保育者は自分の考えを整理して答えてしまいました。しかし、単に「元気ってどういうこと？」と尋ねると、おそらく身体の元気な状態だけを回答する保育者がほとんどであったと思います。ある保育者は「病気や障害のある子どもには元気がないと見えてしまうのは仕方がない。クラスの子どもたちにも『病気になったAちゃん』が早く元気になるようにお手紙を書こうね」と言っている自分がいる」と答えています。

このくらい身体を動かせたら元気がある状態であるという、他者と比較する基準があるわけではありません。保育者は一人ひとりの子どものベースライン（普段の状態）を見極めることが大事です。障害のある子どもの中には、外から見ても、元気があるのかないのかを把握しにくい子どもがいます。しかし、その子の日常の姿をよく見ていてベースラインがわかっていて、「この子がこんなしぐさを見せたり、こんな表情をしたりする時は満足しているし、喜ん



でいる」ということをつかめます。他児との比較ではなく、その子どもの変化として、元気がどうかを判断することができます。

子どもの元気をどう考えればよいか

昔から「外を飛び回っている子どもが一番いい」という元気な子どもも信仰が幼稚園の中にあります。園のイベントの際の園長先生のあいさつや保育参観の際の保育者の言葉の中にも、この言葉は頻繁に登場します。お便り帳の中にも、今日は元気だったとか元気がなかったという表現がたくさん出てきます。この信仰が問題になるのは、身体が元気な子どもだけが評価され、性格的におとなしい子どもや病気・障害のある子どもには問題があることとえられることです。

今回、質問紙に回答したことによって、保育者は「元気には身体の元気と心の元気の二種類がある」ことを知り、それらを分けて回答することができていました。つまり、もともと子どもの見方が柔軟な

保育者は、少しのヒントが与えられることによって意識を変えることができたわけです。

このことから考えて、研修会や先輩保育者のアドバイスから「心の元気な子ども」を評価する視点を若い保育者の中に持たせることができると思います。そして、若い保育者が子どもたちにも、身体が元気なことと心が元気なことの二つとも「元気な子ども」であるということを伝え、また心が元気であるというのはどういうことなのかを具体的に教えていくことができます。そうすることで「飛び回っている子どもが一番いい」という大人の物差しの影響を受けない他者評価の視点を子どもたちは身につけることができます。すなわち、「みんなちがって、みんないい」という見方です。

これまでの狭い、身体の元気だけをとらえた元気を観を幼稚園の中からなくして、心の元気を含めた新しい元気観をつくっていくことが重要です。その考え方が新しい幼稚園文化として根付いていくことを期待しています。

(筑波大学)

私はこう 考える

「子どもは
元気」が
いいのか？

子どもの元気を再考する
―「子どもらしさ」というイメージの中で―

磯部裕子

はじめに

膨大な歴史的資料を基に「子ども」が近代の産物であることを示したフランスの歴史家フィリップ・アリエス (Ph.Aries) の『〈子供〉の誕生―アンシャン・レジーム期の子供と家族生活―』は、われわれの子どもへのまなざしの「あたりまえ」を問い直す衝撃的な書である。本書の歴史書としての評価は、その後の研究者たちの議論に譲るとしても、われわれの子どもへのまなざしと心性は、決して普遍的なものではなく、社会の変化とりわ

け「学校」という教育機関の誕生とともに変化したというアリエスの指摘は、子どもを対象として教育実践するわれわれに、極めて意味ある示唆を与えるものであったといえる。

近代教育の対象としての子どもは、「無垢」「純粹」「善」……という子どものイメージの中で、子どもにふさわしい保護と教育を受け、大人とは異なる存在として位置付けられてきた。おそらく、本特集が再考を試みようとしている子どもの「元気」もまた、この近代の子どものイメージの延長線上にあるものと思われる。教育者がこれらの子

どものイメージを自明視し、「あたりまえ」としてとらえたままであるならば、そこには近代教育が突き進んできた「あたりまえ」の教育の世界が広がるだけである。

われわれが、本当の子どもの「今ここ」に寄り添おうとする時、子どものイメージの「あたりまえ」をどう受け止めていけばいいのか、若干の考察を述べてみたい。

「元気な子」というイメージの中で

園児募集用の幼稚園、保育園のパンフレット、今ではあたりまえになった各園のホームページ等で、満面の笑顔の子どもと広場を走り回る元気な子どもの姿をよく目にする。制作者は、こうした子どもの姿から、良き「子どもらしさ」を描こうとしているに違いない。

確かに、こうした子どもの姿は、見る者をも笑顔にし、元氣を与え、安堵さえ与える。それは、

そうした子どもの姿が、われわれが抱く子どものイメージそのものであるからである。われわれは、こうした子どものイメージをいつの間にか、普遍的なものであるかのように思い描き、そのイメージの子どもを良き姿、つまり「子どもらしさ」としてとらえてきた。

われわれが、子どもの良き姿としての「子どもらしさ」に囚^{とら}われる時、教育は「子どもらしさ」に向かうベクトルのみを持ち、「一定のモデルに従った大人へと成長させるための社会的装置^{せいち}」として機能することになる。アリエスの指摘は、まさにこうした囚^{とら}われの身のわれわれに警鐘を鳴らすものであったともいえる。

「元気な子」というイメージもまた、同様である。われわれがこのイメージに囚^{とら}われれば囚^{とら}われるほど、われわれは、必死で「元気な子」をつくり出したくなるからである。

ある時、園庭のすみっこで、Aちゃんが一人で砂をいじって遊んでいた。その様子に私を含め複数の保育者が気付いていた。その日、たまたま保育に参加していた実習生のBさんもまたAちゃんの姿に気がついた。Bさんは、とっさにAちゃんのそばに駆け寄り、声をかけ、盛んに遊びに誘おうとする。結果として、Aちゃんが、友達と共に鬼ごっこに参加した。その姿を見て「元気に遊べるようになってよかった！」とBさんは自身のかかわりを振り返った。

保育者C先生は、Aちゃんの様子には気付いていたが、Aちゃんの「今」を遠くから見守っていた。保育終了後、C先生は、Aちゃんにとって、あの時間を大切にすることに意味があり、Aちゃん自身が他の遊びに入るまでに時間がかったとしても、それを待つことが必要だと考えていた、と自身の思いを語った。

その後の議論の中で、実習生Bさんは、Aちゃ

んが一人で静かに遊ぶことよりも、みんなで元気に遊ぶことが子どもにとって意味のあることだと思っていたこと、そのために、保育者は、子どもを遊びに誘うことが大事なかわりであると考えていたことが話された。

実習生Bさんのかかわりや思いは、新任のころの保育者であれば、誰もが一度は経験したことがあるものである。もちろん、この場面においても、Bさんのかかわりがまったく望ましいものではなく、あったとは言いい切れない。

しかし、われわれは、保育者C先生のように、Aちゃんの「今ここ」に対するかかわりは一つではないこと、そして「今ここ」を本場に大事にするということとは、保育者の描く子どもの姿に早急に引き上げていくことではないことを知っている。「子どもの元氣」を子どもの良き姿としてイメージすれば、そこに何としても近づけ、引き上げよ

うとする保育者の力学が働く。しかし、保育という実践は、それを目指すものではない。

保育という実践は、子どもと子どもの「あいだ」、保育者と子どもの「あいだ」に起こる物語であり、そこにいる者同士の「今ここ」に呼応して生成する「できごと」であるからである。^{注2}

「今ここ」を生きる実践へ

近代教育が、一定の役割を終えた今、われわれは新たな教育を模索すべきところにいる。「一定のモデル」に従った「子どもらしい子ども」を教育する実践から、子どもと共に「今ここ」を生き、子どもとわれわれの「あいだ」にあるアクチュアリティーとしての実践への転換こそが、今、目指されている。

それは、子どものイメージに囚われたままのわれわれから一歩抜け出すことから始めるしかない。「元氣なこどもの姿」——確かに、それもある日の子どもの一つの姿であることには間違

いはない。しかし、それは彼のすべてではなく、また目指すべき姿でもない。

かつて信じて疑わなかった右肩上がりの発達観を見直し、大人が描いたイメージ（時にそれは、大人に都合のいい子）の中の子どもをつくり出すという教育から、子どもの丸ごとを受け入れ、子どもと共に「今ここ」を生きようとする実践へ——その転換の先に新しい時代の教育実践があるのではないだろうか。

（宮城学院女子大学）

注

1 本田和子『子ども一〇〇年のエポック——「児童の世紀」から「子どもの権利条約」まで——』

フレール館 二〇〇〇年 p.18

2 磯部裕子・山内紀幸『ナラティヴとしての保育学』萌文書林 二〇〇七年 p.180

私はこう
考える

「子どもは
元気」が
いいのか？

「元気」に思う、いろいろなこと

渡邊満美

「元気」って何だろう

すぐに思ったのは、「子どもだって、元気じゃない時があつていい」だった。次に思ったのは、元気って……からだ？　ところ？　もちろん、子どもは元気のほうがよいが……。

「元気」って何だろう。わからなくなつて、「元気で何をイメージする？」と同僚の先生に聞いてみた。返ってきた答えは、「やっぱり人かな……。人とかかわる毎日でしょ、元気をもらう時があれば、吸い取られる時もあるの。だから、波があつて、人っていいな……。の時もあれば、あー、人って面倒くさい！

と思う時もあるの。だから、いつも元気な人って怪しいと思うかなあ。本当に人とかかわる毎日だったら、相互作用で波があるような気がする。本当に人と向き合つてる？　なんて、ちよつと意地悪に見ちやう時もあるかな」。

私の中で、気になった。たぶん、人と向き合う、自分と向き合う、ということ。

保健室——小学生とのかかわりの中で

保健室は、保健室で過ごすことを選ぶ子どもの居場所となる時がある。保健室登校、クラスに行くことができない。保健室で過ごす子どもの近くで、同

じクラスの子どもが、何気なく言うことがある。「ねえ先生、○○さん、元気なのに、どうしてクラスに来ないの?」。元気って何なのだろう。聞いた子どもに問いかけてみた。「元気って、なあに?」。

学校に来られないけれど、電話で話をする子どもがいる。「今日も元気そうね」と私は言う。「元気だよ」と答えてくれる。元気って何なの?

登校後、すぐに保健室に来て、私のひざの上で数分、数秒を一緒に過ごす子がいる。私は彼女に、「今日は元気?」と尋ねることがある。机に向かって仕事をしていた私は、動かしていた手を止め、体を彼女の方に向け、ひざを空ける。ひざに乗っていいよ、という合図。彼女は、近寄ってきてひざの上に乗る。ささくれが出来ちゃった話だったり、来る途中におなかが痛くなった話だったり、寝るのが遅くなっちゃった話をする。たまに、お母さんの話を聞く。家で過ごした楽しい話をしたり、「さみしくなるからし

ないで……」と言ったりする。

休み時間、わが物顔で居心地のいい場所を占領する六年生男子。まるで、保健室は自分たちの居場所のように。人数も多く、あまりにもひどい過ごし方に「もう、出入り禁止!」と声をかけた。すると、「僕たちの人権はどうなるのですか!」と反論してきた。私も「だったら、保健室で気持ちよく過ごせていない人たちはどうなるの!」と始めてしまった。六年生はわかる……そして、反省して出ていく。近くにいた子が「先生、あの人たち」元気なのに何でいるの?」と一言。「元気でも、保健室の必要な時があるから……」と返す。その日の休み時間、少し反省して、出入り禁止の保健室で静かに過ごす六年生。私も黙認。しかし、だんだん大きな態度、復活!なぜ、今、ここが必要なのか……、見極められないでいる。彼らに、「元気?」と声をかけて、かわわっていくことが必要なのだと感じている。

聞く人のためにある？

「元氣？」という問いかけは、聞いている人の、元氣でいてほしいという思いなのかもしれない。聞いている人が相手を理解したいため、問いかけてしまうのかもしれない。

自分が「元氣？」と聞かれることを考えた。体は元氣だけれども、疲れていたりすると「元氣」と即答できない。しかし、疲れ過ぎている時、「元氣」と答えてしまうことがある。相手を心配させないために使う「元氣」であることが多い。「元氣」と答えることで人を安心させることもある。同時に、答えている様子で、聞いてくれた人を心配させることもある。元氣という言葉が、言葉だけでなく雰囲気でも使われていることにも気付く。

「元氣？」と聞かれているということは、自分を氣にかけてくれている人がいることになる。「元氣だよ」と答えてほしい人。「元氣じゃない」と伝えて、今の状況を共有してほしい人。

いつも元氣な人は怪しいと言った。周りを氣遣って、いつも元氣にしているのかも……。それは、人と向き合っていないのか、人に氣持ちをうまく伝えられないのか、それとも自分の状況と向き合えないのか……。

保健室から伝えていきたいこと

子どもだから元氣でいる必要はない。子どもも人。元氣な時、元氣でない時があつていい。元氣でないことを出せる環境のあることが必要なのだと思う。そして、出している自分に氣付いていけること、自分の中でバランスを取れていけること。そこに、かわってくれる人がいることに氣付いてほしい。そのことに氣付くと、いずれ誰かの支えにつながっていきけるのではないかと思う。

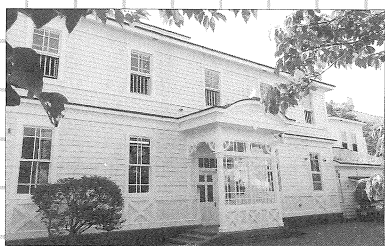
保健室は、いつも元氣な人が、元氣でいなくてもいい場所でありたい。そして、人とかかわることを嫌だと思ってしまう前にかかわっていきたい。

(東京学芸大学附属竹早小学校)

遺愛幼稚園

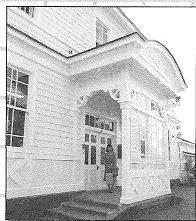
北海道函館市

シリーズ
子どもが
育つ場所を
訪ねて



日本全国にある「子どもが育つ場所」を幼稚園教員が訪問。自分の目で見て聞いて感じたことをレポートします。

第5回は函館、遺愛幼稚園。伝統ある園、ぬくもりある木造園舎で、子どもたちは伸びやかに暮らし、命の大事さ、信じる心を感じながら育まれています。



◆異国情緒漂う町並みの中にある幼稚園

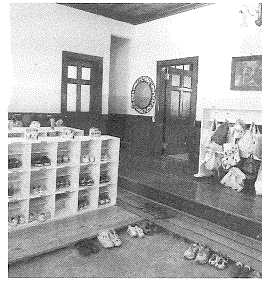
函館駅に近い宿泊先から歩いて幼稚園に向かう。道の途中には日本最古のコンクリート電柱、そのま
ま二十間坂を上ると「東本願寺函館別院」の堂々た
る姿が目飛び込んでくる。この建物は日本最初の
鉄筋コンクリート寺院だという。異文化をいち早く
取り込んだ歴史を今も目の当たりにすることができ
る町並み「伝統的建造物群保存地区」に位置する遺
愛幼稚園を訪れた。

「幼稚園はもう近いはず」と次の坂を曲がると、八
幡坂から見下ろす函館湾の景色が目の前に広がった。
CMか映画で誰もが目にし
たことのある八幡坂を上り
切り、左へ曲がるとすぐに
幼稚園。やさしいピンク色
の木造園舎は異国情緒漂う
町並みにしっくりとなじん
でいる。建物の壁にはこの



辺りでよく見かける「伝統的建造物」のプレートがはめ込まれており、園舎そのものが保存地区の大切な建物の一つになっていることが訪れた人に伝わる。

「ここが現在も使われている幼稚園？」と素敵な園舎のたたずまいにしばし見とれてしまう。アプローチの階段を数段上り、インターホンを押す。返事とともに扉が開き、かわいい声が「どうぞ」と招き入



れてくれた。玄関に入ると旧家のお宅にお邪魔しているようで、子どもたちも幼稚園という家を訪れるような気持ちで通園しているのだろうと想像された。

◆本物に囲まれた暮らしを

木造二階建ての園舎内に足を踏み入れると濃い茶色の木の天井、柱がととも落ち着いた雰囲気を醸し出している。園舎一階は保育スペースで中央に遊戯室（以下「ホール」）があり、その両側に小さめの

保育室が二部屋ずつあり、四、五歳児がそれぞれ二つの保育室を使っていた。

ホールではちょうど朝の集会をするところだった。ふと見ると、隅の方に座っている子がいた。大丈夫かしらと思っ

て見ていると、そっと近づいてきた友達と話を

して、晴れやかな顔で集会の列に加わっていった。先生が大きな声で子どもを集めることもなく、自然に会が始ま

っていく。厳かさを感じ

る空間の中で、子どもたちが活動する姿はあくまでも自然で、伸びやかに体を動かし、笑い声や大きな声も上がっていた。



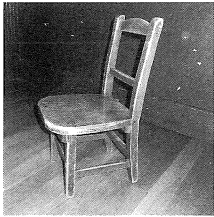
北海道の二期は始まりが早く、九月には運動会があるという。この日の集まりではみんな

で体操、そして副園長先生のお話を聞いたあと、中央のホールでは三歳児がかけっこの練習を始めた。その隣の保育室では四歳児が担任の話を聞き、歌を歌



環境構成になっている。

ホールの周囲に置かれたプラスチックのブロックは木箱に収められていて、室内に置かれる遊具の環境が調和的に保たれている。「小さいころになじんだものは大きくなっても忘れません。壁に貼るものも昔からのもの、大人の鑑賞にも堪えられるものだけを飾るようにしています」と吉田真理子副園長先生は語られた。子どもたちが座る椅子から木が



い始めた。異学年の活動が隣り合わせて進められ、他学年の活動が自然に目に入りながらそれぞれが自分たちの活動に集中している。オープンスペースの小学校が盛んに作られるよりずっと以前に作られた園舎は、回遊式の空間であり、今も新しさのある斬新な

大切にされていることが伝わってきた。

◆見上げると函館山

園舎の裏側には畑があり、自然農法でイチゴやインゲン、エダマメ等を育て、収穫後は自宅に持ち帰って食したりしているという。園庭は園舎を取り巻き、決して広いとはいえない。幼児期は好奇心旺盛に、いろいろな体験ができるようにしたいと考え、特に自然とかかわる体験を大事にし、山へ出かける機会も多くしているという。

新旧の園舎をつなぐ廊下に手洗い場がある。手洗いうがいをする時、見上げると函館山が視界に入る。二つの園舎が左右のフレームになって、毎日の生活の中で紅葉や雪景色と季節の移ろいを感じられる、とても魅力的な空間になっていた。

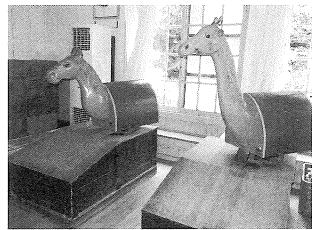


子どもたちはお隣にある「函館ハリストス正教会」の鐘の音でお弁当の時間に気付いてここへ手を洗いに来るといふ。こうした日々の生活の中で、子どもたちの心と体に情緒の豊かさが確かに蓄えられているのだろう。

園庭はコンパクトながら、樹木も昔からあるものイチジク、ボケ、梅、桜、ツツジ、ボタン、カエデと多様な種類の木が植えられていた。畑の近く、裏の広場の中央にあるクルミの木は大きく枝を広げ、子どもたちを見守っているように感じられた。

◆歴史を大切に、今の子どもたちの生活につなげる

室内運動場は本館建築の翌年、大正三年に建てられた。室内には木製の動物乗り物が二基置かれていた。キリンとウマの乗り物は大人でも乗ってみたくなる懐かしい風情で、元々は下部の台にモーターが内蔵されていたそう。今でも子どもたちに人気の遊具であるとのこと。園庭への出入り口には、おもちやコレクターなら垂涎もののレトロなブリキの乗



り物も置かれていた。

室内には高く吊り下げられたブランコや砂場もあり、北国の幼稚園、厳しい寒さの中、園舎の中で体を動かして遊べるような工夫が当時からなされていたことが伝わってきた。

旧園舎の二階は現在、園長室や職員室、和室、倉庫になっている。以前は宣教師の住まいだったという。園長事務室には、軽井沢

彫りの素敵な家具があり、倉庫にはたくさんのフレイベルの恩物用の机が収納されていた。隣の小部屋には貴重な研究資料が置かれたフレイベルの机があった。聖学院大学の永井理恵子教授がここで調査を続けているとのこと。遺愛幼稚園の歴史が時間をかけて





▲フレーベルの恩物机

ひもとかれた集大成が、近著『近代日本キリスト教主義幼稚園の保育と園舎』として出版された。詳しくはそちらをぜひお読みいただきたい。研究者と実践者の出会い、立場は違おうとも、保育の成り立ちの歴史を大切に、今につなげて生かしていきたいという熱意がこの場所からもひしひしと伝わってきた。

吉田副園長先生は「父、私、息子と親子三代の卒園生です。自分がここで育って、役立っているものがあるのです。自分がここで受けてきた教育を、今のお子さんにそのまま伝えていきたいのです」と話された。膨大な歴史的資料の整理にあたっていたエネルギーの源はここにもあるのかもしれない。

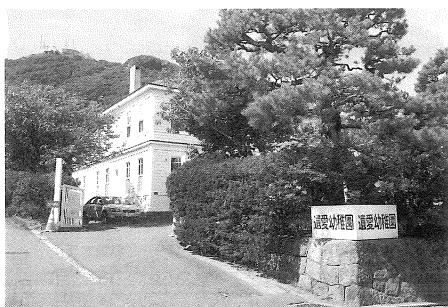
二階の廊下は六センチも床を上げる補修をされたという。「建物が傷んできています。土台の上の木を直せばあと百年もつといわれていますが……」。大切に保ち続けるためのご苦勞もうかがわれた。

新築の園舎の三歳児保育室も木を大切にして、旧園舎との調和が保たれていた。二階には一、二歳児の部屋があり、ゆくゆくは総合的に子どもが育つ場所にしたという。伝統を大切にするだけではなく、今の必要性に応じ、これから見つめる教育観が伝わってきた。

◆キリスト教と保育

「遺愛幼稚園の保育はキリスト教を基としています。神から与えられた自分の命を大切にして、十分に自己発揮できる人になると同時に、他者と共に心を寄せ合うことのできる人になってほしい。そして目に見えないものを信ずる心を持てるようにと願いつつ、日々子どもたちと共に歩んでいます」と吉田副園長先生のお話を伺った。

皆で感謝する心や人を思いやることを大切にしていくことは、この日の保育場面でも「お休みの○○ちゃん、早く元気になりますように」と担任の先生が話されている場面から伝わってきた。



自分が働く園がそんな場所になれたらと願わずには
いられないという思いを強くした。

ある時、園舎の外壁を調べたら、十色もののペンキ
が塗り重ねられていたという。その時々にお化粧直
しをしながらこの場所にあり続けた園舎、北海道に
初めてできた幼稚園。時を重ねた空間がこれからも
永く子どもたちと共にあり続けてほしい。

訪問者／上坂元・吉岡

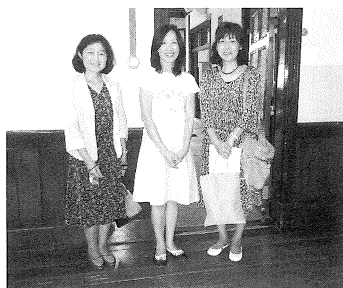
文／上坂元絵里（お茶の水女子大学附属幼稚園）

昨年、米寿を迎えた卒園

生が車椅子に乗って園を訪
ねていらしたという。「自
分が確かにここに存在して
いたことを確かめていらっ
しゃいました。この幼稚園
の大切な役目を改めて感じ、
身の引き締まる思いがしま
した」という話に、幼児教
育に携わる者なら誰しも、

注

永井理恵子『近代日本キリスト教主義幼稚園の保育
と園舎 遺愛幼稚園における幼児教育の展開』学文社
二〇一一年九月



— 訪問メモ —

訪問時期：2011年8月


訪問場所：学校法人遺愛学院
遺愛幼稚園

〔創立〕1895（明治28）年

〔住所〕北海道函館市元町4-1

〔電話〕0138-22-0419

<http://www.iaiyoshi-h.ed.jp/iaikid-m>



私の保育ノートから

おもちゃの取り合いから考えたこと ― 過去の記録から学び直す ―

川島明希子

私は、大学を卒業後、乳児保育所（0～2歳児対象）を二園経験し、保育士として七年目の現在、公立の一六歳児対象の保育所に勤務しております。

今振り返ると、乳児保育所は、小さい子どもが集うところらしい、穏やかな雰囲気満ちていました。その雰囲気のかみに包まれながらも、新米保育士であった私は、この子は今、何を求めているのだろう、自分なりにこんなかわりをしてみたけど、よかったかな？と心も身体も目いっぱい使って試行錯誤していた日々でした。

もちろん今でも試行錯誤の毎日であることは変わらないですが、保育士なりたてで悩んでいた経験は

特別なもので、決して忘れることができません。

特に、保育者としての対応を考えさせられたのが、子ども同士のいざこざ、中でもおもちゃの取り合いでした。どちらが、正しい、間違っているではなく、それぞれの気持ちをどのように支えていくことができるのか、今でもふと考えることがあります。今回は今までの乳児保育所時代の記録を取り上げ、その当時の子どもの気持ちにもう一度思いを寄せ、私なりに保育を再考してみたいと思います。

記録1

おやつの後、「シンデレラ、するの。カモン！」とA子

（二歳三か月）に誘われ、広いスペースでシンデレラになりきって一緒に踊る。そこへミニー（ぬいぐるみ）を抱いたB子（二歳四か月）がやって来て、「B子もー」と私と手をつないで踊る。三人に一体感があり、心地よい。楽しく踊っていると、C男（二歳二か月）が場に入り、A子の背中にくっついたり、A子のまねをしてぐるぐると回ったりしていた。そして、B子が「わたしの名前はB子ちゃん！」と言った時に、C男は「B子ちゃんC男くん！」とB子の名前にC男の名前をくっつけて言ってみては楽しそうな表情を浮かべている。

C男も入り、広がった世界に充実した気分でしたが、あの瞬間からC男が無言でB子のミニーを奪おうとしている。だが、B子のほうが断然力が強く、奪えない。どうしたのだろうか？と様子を見ながら踊り続けていると、何度も何度もミニーを奪おうとしている。取られないものの、かなり長い時間取られそうになってB子が相当いらいらしてきたので、仲介に入る。「貸してって言ってみたら？」「B子ちゃん、帰る時間になったら貸してくれる

から、待ってくれる？」など声かけしてみるが、C男は今すぐB子からミニーを取る。以外は全く受けつけず、力で奪おうとする。埒があかないと思い、「C男くん、待てないらしい。走って逃げよう！」と、手をつないで広いスペースをぐるぐる回る。やっとB子に笑顔が戻る。心配そうに見ていたA子も、「あそんでるね！」と笑顔になり、後からぐるぐる追いかけるように回る。C男はあきらめ切れず、B子の後を追いかける。その顔が苦しい、悲しいというよりは、何かに挑戦している。ような顔つきであることが印象的だ。相当長い時間走ると、C男は何かに潰されるように、床にうつ伏せで寝転がる。その後も何度もミニーを奪おうとするが、なかなか奪えない。しばらくして、B子がトイレに行っている間、床に転がっていたミニーをC男が拾ったようで、ミニーを持って私に「ミッキーちゃんにチューしちゃった！」と報告する。そう言くと、さつと自分の好きなブロックの方へ行く。あっさりミニーを投げ捨てて、遊び始める。

（後から知ったのだが、この事例の直前にC男はミッキー

のぬいぐるみをD子(二歳十か月)に奪われていたらしい。

この事例では、長い間B子を追いかけてミニーを手に入れようとしたC男が、手に入れたことで満足して、他の遊びに気持ちが向いたことが印象的でした。C男にとって、ミニーで遊ぶことではなく、ミニーを手に入れることが目的だったように思えます。

D子に取られたミッキーのぬいぐるみがC男の気持ちの中で欠けていたため、ミッキーに似たミニーで気持ちを満たそうとしたのかもしれませんが。もしくは「私の名前はB子ちゃん」の後、「B子ちゃんC男君」と自分の名前にB子の名前を付けてみたくなるほどにB子と共鳴し合うことを求めた結果、B子の持つミニーが欲しくなったのかもしれませんが。どちらとも考えられ、C男の気持ちを断定することはありませんが、どこことなくそう感じられます。

記録2

お砂場にて、ペットボトルを船に見立てて走らせるのを

終えたE男(三歳六か月)は、F子(二歳二か月)がどんぐりをお鍋に入れてままごとをしているのをじっと見ている。すると、F子のお鍋をぎゅつと取ってしまふ。「E男君、ぎゅつて取ったら嫌だつて」と伝えたところ、「うん」と言うものの、返そうともせず、お鍋で遊び続ける。いまいち聞いてない？

F子は、お鍋を取り返そうともせず、さらっと別のお皿で遊び続ける。そこへE男が同じようなお皿、お玉を持ってきて、近くでままごとをし始める。時折F子の様子を見ている。E男のままごとの仕方はF子そっくりで、まねしているようだ。ただ、表情が険しい。しばらくすると、「かーしーてー」と言いながら、またぎゅつと取ってしまふ。F子は、お砂場から離れて、大きなタライのある所へ行く。引っくり返してあるタライを「とんとん」と叩くのを楽しみ始める。すると、E男も来て、F子のように「とんとん」と同じタライを叩き始める。お互い顔を合わせてニコニコ。とても楽しそう。

そうかと思うと「とんとん」のリズムに乗って気持ち弾んできたF子がタライを持つて歩こうとすると、「タ

メー」と言って取り上げる。タライを置いて、さつきと同じようにタライを叩くのかと思いきや、F子がやるうとしていたタライを持って歩くことをやり始める。それから、E男はF子の持っているものをすべて取り上げてしまふ。ついにF子が泣きながら、私のひざに来る。E男が目の前に来て、F子に「いっしょにあそぼうよ!」と誘うので、「F子は遊んでいるものを取られたことが嫌なんだよ、今はそつとしてあげてほしい……」と私から伝える。

F子の気持ちが落ち着いてきたころ、E男は一人でままごとの世界を広げていた。普段見られないほど、とても充実していた。

お砂場からあがつて、昼食のため席に着いていると、「とりあいっこしたね!」「楽しかったね! ねっ、みんな!」と友達に呼びかける。皆はよくわからなくて無反応なのに、E男はニコニコと満足そうだった。

E男は仲良くなりたい相手を選んで、「まねっこする↓相手のものを取る↓相手が離れるとまた近づいてまねっこをする」の繰り返しを毎日していた。相手の友達に

とつては、大人側がどんなにE男の思い(魅力的だから、取りたくなつた)を代弁したところで、何度も取られることは受け入れ難いかかわりであることに変わりはない。基本的には、ある程度子ども同士のやりとりを見てから仲介した方がいいかと思いがあがるが、この場面ではどこで仲介したほうがいいのかと迷う。

記録2を読み直すと、F子の使っているおもちゃをたくさん取ってしまった後に、「取り合いっこしたね。楽しかったね」と満足そうにいざこざを振り返っていたE男に、私自身がぼうぜんとしてしまったことを思い出します。F子のことも考えると複雑な心境だった私にとって、満足そうな表情のE男を見た時、E男の気持ちが遠いもののように思え、置いていかれたような気持ちになったのです。

改めてE男の立場になってみると、F子と一緒に遊ぼうとしているわけではないようでした。それよりも、F子になって遊ぼうとしていたので

はないでしょうか。

E男は、F子のお鍋を取り上げてF子になって遊んでみるものの、F子が別の遊びをしているのを見ると、今していることがF子ではないものに感じられ、やめてみる。そして、F子がちょうど今使っているお皿やお玉を持ってきて、F子と同じように遊ぼうとします。それはE男なりに自分の内にある要求を表現するための試行錯誤の一つだったのです。けれど、それはE男の要求そのものにフィットしていなかったからこそ、「表情は陰しい」だったのかもしれませんが。

F子がちょうど今使っているおもちゃを取り上げ、E男がその時のF子になって遊ぶ行為は、E男にとって、友達の魅力的な遊びを通して、自分の遊びを豊かにしようとする一つの方法だったと思います。だからこそ、E男はたくさん取り上げた後、自分の力で、ままごとの世界をつくり上げたのです。

私は、この事例でのいざごの最中、E男の要求をどこことなく感じていたことと、F子がおもちゃを

取られても、さっと気持ちを切り替えて別の遊びをしていたことがあり、そのまま二人の様子を見ていることになりました。ただ、今思えば、F子はE男よりも小さい人だったから、嫌だった気持ちをすんなりと出せず気持ちを切り替えずにはいられなかったのかもしれませんが。本当のところはもうわかりませんが、その可能性があるのなら、F子に「嫌だと言っても大丈夫だよ」という何らかのサインを送るべきだったな、といまさらながら反省しています。

E男の「取り合いっこしたね。楽しかったね」という言葉が、私の気持ちのどこかに引っかかっていたのは、E男がF子の思いに気付いてほしいなと、どこかで考えていたからだと思います。E男も自分の要求を叶えるのに一生懸命なのでF子の思いに気付くのが難しいかなと思いつつも、もし今の私がタイムスリップできるなら、F子に確認した上で、もつとF子の思いを伝えようとするかもしれません。

C男やE男の側に立ってみると、友達のおもちゃ

を欲しがるという行為の裏にある気持ちは、ただ「そのおもちゃが欲しい」だけではないことが伝わってきます。友達そのものになって、魅力的な遊びを体感する「であつたり、自分のどことなく満たされていない気持ちを満たす」であつたりすることもあるようです。そのことを考えると、友達のおもちゃを欲しがることを、簡単に「友達のだからダメ！」というのは乱暴な対応なのかもしれません。取られる側にいる友達の気持ちをくみ取りながらも、おもちゃを取ろうとする子の気持ちがどうしたら満たされたり切り替えられたりするのか、丁寧に考えていく必要があると思われます。

保育者がおもちゃを欲しがる子の気持ちをくんで対応することは、おもちゃを取られそうになった子にとっては相手の思いに気付く機会になる可能性もあるのではないのでしょうか。自分の大事なものを取られるという体験は、自分の一部を取られるようにつらいものではあるでしょう。ですが、そのつらい

気持ちが保育者によって支えられるならば、友達の思いに気付くチャンスに一步步近づくように思います。

また、おもちゃの取り合いというのは、保育者が向きを変えてみると当事者以外の子どもたちもよく見ているということがあります。おもちゃの取り合いのような緊張した場面でも、周囲の子どもたちは両者の気持ちを自然と感じているようです。保育者は一つの取り合いの対応であつたとしても、そこにいる子どもたち全体に何かを発信することになるのかもしれない。

今回、過去の記録を読み直して考えたことは、以前より幅広い年齢の子どもと触れ合うようになった今にも通じることと気付き、改めて気持ちが引き締まる思いです。子どもたちも私も楽しい！と心から思える生活を大事にしながら、一人ひとりの要求が満たされることを目指し、これからも試行錯誤を重ねていきたいと思います。

(東京都公立保育所)

私の保育ノートから

子どもの目線になって見えたもの

川辺尚子

五月十日（火） 晴れ

「気持ちいいところがあるよ」と誘われて

三歳児保育室から園庭に出て、十メートルほど先に、小川（庭の段差を利用して造られた人工の川で、夏場を中心に水道から水が流れる）があります。そこに小さな橋が架かっていて、その橋のふもとから、小さな男の子がじっと私を見ていました。

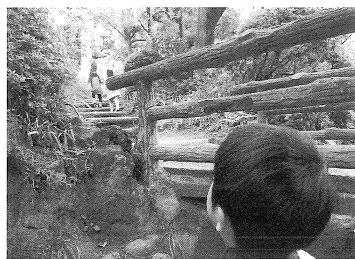
目が合って、何となく誘われるようにして近づくと、彼は「気持ちいいところがあるよ」と小さな声で話しかけてきました。

そこで、私も彼の横に腰を掛けてみることにしま

した。このころは、小川の水が流れておらず、川の縁に腰を掛けることができたので、ちょっと隠れた空間になっていました。腰を下ろすと、そこはとも静かで、風がすつと通りました。

「本当に、気持ちいいところね」と私が言うと、彼は「ママに会いたいの」と言いました。

彼は、まだ入園して間もない三歳児の男の子でした。そうか、そのことを言いたかったんだと思い、「そう。ママに会いたくなっちゃったのね」と声をかけながら彼を見ると、寂しそうにしている様子はなく、あちこちをきよきよとせわしなく眺めています。



ふと背中を丸めて彼と同じ目の高さになって、彼の目線の先を見ると、年長の女の子二人が手をつなぎ、軽やかな足取りでお山の上に向かって駆け上っていく姿が見えました。

そして今度は、後ろを振り向く彼の目線の先を見ると、三歳児クラスの入り口

と、その前で砂を掘ったり、運んだり、先生と話したりする子どもたちの姿がありました。

彼は、私の横で「ママがいい」「ママに会いたいのだ」とつぶやくように言い続けながらも、じっとその様子を見ています。



彼と一緒に、担任の先生と数人の子どもたちの姿を目で追っていると、園庭の真ん中の桜の木が見えました。その木の根元に子どもたちの群れが見えました。

私は、「何をしているんだろうね？」と言いながら、ゆつくりと腰を上げると、彼も立ち上がり、私の後をついて来ました。

子どもたちの群れに近づいてみると、そこでは、年長児が池で捕ってきたオタマジャクシをのぞき込んだり、虫かごに移し替えたりする子どもたちの真剣な姿がありました。

彼は、オタマジャクシがうごめく水槽の中をのぞき込んだり、年長児がオタマジャクシをすくい取る手元を



じつと見たりしていました。そして、逃げるオタマジャクシに「ひゃあ、ひゃあ」と騒ぐ子どもたちの姿に目を大きくしたり、思わず口元を緩めたりしていました。

そのうち、彼がふと顔を上げると、目線の先には、また年少児のクラスがありました。そこには、変わらず担任の先生や子どもたちの姿がありました。

そして彼は、ずっと手に持っていた虫かごに視線を戻すと、その場にすんと腰を下ろし、足元の砂をすくい取って、「ママのお弁当なの」と言いながら、虫かごの中に入れました。

子どもの目線になって、見えたもの

私は、二〇一一年度より、お茶の水女子大学附属幼稚園に勤めています。幼稚園教諭ですが、担任で



はなく、園内の研究のために記録を取る役割が与えられています。このころの私は、自分の居方についてかなり考え込んでいました。研究者として保育をする、保育者として研究する、どちらでもあり、そのどちらでもない、まだ働き方やかわり方がよくわからない時期でした。勤め始めて数日目でしたし、幼稚園に勤務するのも十年以上のブランクがあり、以前に勤めていた幼稚園とはずいぶん違った雰囲気でもありました……。でも、そういうことよりも、この幼稚園では新人保育者だという現実を突き付けられ、私に勤まるのだろうかと不安を抱いていたのです。どこにいても落ち着かず、あれやこれやと見て回っていたような時期でした。

そんな私への思いがけないお誘い。一人で川のくぼみに腰を掛けている彼が、こちらを振り向いて、「気持ちいいところがあるよ」と声をかけてきた時、私は、ちよつと不思議な感じがしました。今思えば、この誘い言葉が、彼のあだけない顔には不釣り合いな大人びた言葉に感じたからだと思います。面白さ

や興味深さなど不思議な思いを抱きながら、彼の隣に座ってみると、何と、そこは本当に気持ちの良いところだったのです。

「気持ちいいところ」に、彼と同じように、ただゆったりと座って見上げると、木が風にそよぎ、葉っぱが揺れる音が聞こえました。そして、ふっと肩の力が抜けて、気持ちまでもがゆったりとしました。

彼と同じ目線になってみると、さまざまなお子さまたちの生き生きとした姿が目に見え込んできました。

お山への階段を駆け上る年長児の二人は、大きくて優雅で、楽しげで、これからあの山で何が起こるのだろうとわくわくさせられました。

年少児クラスの前には、砂をすくっては運ぶ子どもや、バケツに黙々と砂を入れる子どもがいて、それぞれ真剣なまなざしが見えました。

また、子どもと共に、バケツを砂でいっぱいにして、先生や保育室の中から「せんせーい、せんせーい」と声をかけられ、「はあい」と優しく

答える先生の姿があり、年少組の先生と子どもたちの暖かく包まれた世界に見えました。

ファインダー越しに見た世界

子どもが見ている世界を眺めてみて、「ああ、幼稚園って何て幸せな場所なんだろう」と思いました。そして同時に、自分が入園したての子どもたちと同じように、この世界をまだ客観的に眺めているという感覚に気付かされました。この幼稚園は、じっと見ていたい魅力的な世界でした。そして、「見ている」ことで精いっぱい、かわるはるの恐れ多いような気持ちでいました。

でも、だからこそ私は、幼稚園のカメラがあると、不思議なくらい堂々とあちこちを見て回ることができました。それは、「研究のための記録を取る」という大義名分が与えられていることで、「かわるはる」とよりも「見る」ことに重きが置かれていたお陰だと思えます。その時、その場所、その子どもへの思

いを込めてシャッターを切りながら、確かに記録を重ねることで、幼稚園を知り、ため込み、その場を共有していきたいと思っていました。きつと、そうやって、幼稚園の中に自分の居場所を見いだそうとしていたのだと思います。

この日出会った彼が、虫かごに砂や葉っぱを入れていたことにも、同じような思いがあるように思えます。彼の虫かごには、砂や石や葉っぱが入っていました。そして、この日には新たに桜の木の根元にある砂が加えられました。彼は、この虫かごの中に母への思いを詰め込みながら、少しずつ幼稚園の思ひ出を積み重ねつつあるのではないかと思います。

そう思うと、彼が私に声をかけたことが、ただの偶然ではなかったように思えてなりません。ほかの子どもや保育者が真剣に遊ぶ姿を見ていて、あこがれながらも、保育者としての居場所を模索していたことが、彼には見抜かれていたのかもしれない。

そして、私は、彼が声をかけてくれたことをきっかけに、時には一つの場にとどまり、子どもの目線

に合わせて座り込んだり、時には子どもと気持ちの赴くままに遊ぶことを通して、私自身がこの幼稚園の保育を経験し、体中で感じながら、保育者として育っていきたいと思うようになりました。

時が経って、今思っていること

あれから約一年が経ちます。保育者として、どのように働いたらいいのか戸惑い、悩んでいたことを思うと、ずいぶん子どもの姿から学んだのだということに気付かされます。

実はこの後、彼と私は一緒に遊ぶことが増え、そのうち、彼が私を見ると声をかけてくるようになりました。私がいると彼の遊びを邪魔してしまうような気がして悩みました。かつて別の幼稚園で勤務し、担任だった時には、自分という存在を手掛かりに、安心できる場を広げられるようにしてきました。でも、担任とは違う立場の大人として、どのように子どもたちとかわつたらいいのかわからなくなってしまうのです。

でも、日々の保育の中で、いろいろな子どもたちと出会い、フラインダー越しに眺めている間もなく、あちこちで子どもたちから声がかかるようになっていきました。そして、誘われるがままに虫を捕り、花を摘み、砂を掘り起し、山へ駆け登り、ままごとをし、製作を手伝い、時には観客やお客になり、また時にはお化けになったり……、とにかく毎日子どもたちと遊んでいるうちに、悩んでいたこともあまいになったまま、時が過ぎていきました。

そして、彼はいつの間にか、木の線路をつないで友達と遊んだり、砂場で幼稚園より大きなお山をつくるというバケツの砂をいっぱいにしたりして遊ぶようになっていました。

あの日、彼が桜の木の下で、持っていた虫かごに砂を入れた時のが、特に印象に残っています。珍しい世界に引き込まれるようにして私について来た彼でしたが、ふと自分のクラスの方へ目をやり、担任の姿を確認してから砂を入れました。

小さい子どもにとって、新しく足を踏み入れた幼稚園は、どんなに豊かで大きい世界なのでしょう。でも、その子どもが、担任やクラスを大きなよりどころにしながら、この世界をじつと見て、ゆつくりと味わい、だんだんと動きだしていくのです。そして、その子どもも、生き生きと遊ぶようになり、

やがてこの世界の担い手となって育っていくのでしょうか。そのことを、私自身がじっくりと見て、経験しながら学んでいるということを実感しています。



(お茶の水女子大学附属幼稚園)



心が育つということ

「意思」を育てる

豊田一秀

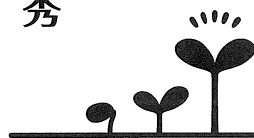
はじめに

前回、本誌に「心が育つということ」という題名の下、連載を執筆する機会を得たのは、一九九〇年六月号からであるから、かれこれ、ふた昔以上も前のことである。当時、私は保育者として幼稚園で担任をしていた。時が流れ、現在、私は大学において教員養成の仕事に就いている。仕事の内容は変わったが、常に私の心には「心が育つ」という、あいまいな言葉がモヤモヤと存在している。

今回の連載にあたり、表題に「続」という言葉を足して、幾つかの切り口と共に「心が育つということ」について再び考えてみたい。

「癖になる派」対「気が済む派」の飽くなき争い

家庭であれ保育の場であれ、大人は無意識のうちに「癖になる」または「気が済む」、どち



らか一つのキーワードで子どもに対応しようとしている場合が多いように私には感じられる。それぞれの考え方は、普段は、大人自身にもはっきりと意識されることは少ないが、子どもに対する時のみならず、人間の心の育ち全般に対するわれわれの態度となつて現れてくる場合も少なくはない。二つの「派」の考え方を見てみよう。

まず、「癖になる派」の主張のあらましは以下のようなものである。①人は易きに流れようとする基本的傾向を持つ。②人は癖がつきやすいので、良い癖がつくよう、悪い癖がつかぬように常に考えなくてはならない。③「癖」とは、習慣によつて反復的に行動できるようになることである。④「癖」をつけるためには繰り返しが必要で、例外をつくつてはいけない。

⑤「癖」はアメとムチによつて形成される。⑥人は目に見える「行い」によつて評価される。

次に「気が済む派」の主張を見てみよう。この主張は以下のようなものである。①人は、気が済めばその行動をしなくなるものである。②気が済む＝満足によつてその事柄を「卒業」させてしまうことが、結局は人間が変わる・育つにあつたての確かな道であり、近道である。③我慢をさせて子どもの表面的な行動を規制しても、心の中ではその事柄を卒業できていないので、規制が無くなった後にはすぐに元の行動に戻ってしまう。④その行動がしつこく続く場合は、過去において満たされるべき事柄（卒業しておくべき事柄）が、何らかの事情によつて満たされていないためと考えられる。⑤規制を緩め、発散させ、早く「卒業」に導くことが大切である。⑥行動よりも行動を起こす基にある心の存在に重きを置く。

「癖になる派」の人々は、良い癖がつくよう、悪い癖がつかないよう必死である。「抱き癖」がつかぬよう子どもの言いなりにならない。歯磨き、宿題、食事を残さない。自分のことは

自分でする……良い癖がつくためには、いつも一貫した親の態度が必要であると考えるので、例外をつくることには否定的で、杓子定規的な規則正しい日々が待ち受けている。

一方で「気が済む派」の人々は楽天的であり、あきらめ적이다である。今、注意しなくてもいつか時が来れば自然に……と、子どもとの対決を避ける傾向がある（この両派の主張の陰に、行動主義的な考え方と、精神分析的な考え方の「におい」を感じる読者もいるのではないか）。

第三の道

人間の行動は「癖」によって形作られていくものである。それとも、満足感を得ることや、過去の不充実を穴埋めすることによる満足・発散を基本とした「気が済む」ことによって形作られていくものなのであるか。社会を見回した時、「癖になる派」「気が済む派」の主張がそれぞれ人間の一面を語っていることは事実であろう。しかし同時に、これら二つの尺度のみで人間を見る危険性もあるように感じる。

そこで、私は第三の道として「意思を育てる」という視点を持つことが重要だと考える。意思とは、自らの力で自分を操ろうとする時の源泉である。意思は時に自分を律し、また、時に自分を許す。

意思が育つ基にあるモノは、第一に自分の意思に対する気付きであり、肯定感であり、さらに言えば自己の能動性に対する信頼であろう。「意思」は、以下のように人に作用できる。

①人は悪い癖から抜け出すこともできるし、逆に良い癖を崩すこともできる。
②人は快を求めている存在であるとしても、その快の質を利己から利他へ高めることもできる。
③人は満

足できないことでも、我慢しなければならないこともある。

意思の育ちはこんな小さな日常の中にも存在する。自分でスプーンを使い始めた赤ちゃんが、食事中に何度も何度もスプーンを床に落としている。赤ちゃんは自分の手を見つめながら、真剣な顔で手を開く。スプーンは床に落ち、カチャンと音を立てる。赤ちゃんは母親に拾ってくれとせがみ、母親がせっかく拾ってあげても、また落とす。その繰り返し……。

赤ちゃんの名誉のために付言するが、赤ちゃんは母親の忍耐を試しているわけではないであらう。赤ちゃんは、発見したのだ。手を開くとスプーンが手から落ちるということを。そして、自分の手を自分の意思で開く喜び、手を開くと思いつくことにスプーンが落ちてくれ、期待した音を立てるという面白さを。さらに、目前から消えてしまったスプーンが母親に頼めば手元に戻ってくる確かさを……。




自分の思ったとおりに事が起こる心地よさを通して自分の意思の存在を知る。これを、赤ちゃんが「自分が世の中を変えられる体験」(能動性の体験)をしていると言ったら大げさに過ぎるだろうか。「自己存在の肯定的把握」と言ったら我田引水に過ぎるであらうか。

スプーン落としを許すと、食事の悪い癖がついてしまうと考えるのではなく、また、スプーン落としに我慢して目をつぶってあげれば、いつか赤ちゃんがそれを「卒業」するとあきらめてしまうのでもない、第三の道……。赤ちゃんの意思を育てる援助、すなわち、赤ちゃんの発見や喜びに対する共感的理解が大人に求められているのだと思う。

身近な大人が、子どもの行動に意味を見いだそうとする、その態度に支えられ、子どもは初めて自分の意思の存在を肯定的につかみ取れるのではないだろうか。

(玉川大学)

からだ考

食べる 
つながる 
育つ 

命を学ぶ食農保育 (1) 命の保育をデザインする

倉田
新

1 今再びフレールベルに還れ

現在から半世紀以上前、日本教育学会初代会長の長田新先生は「科学に魂を賦与するため
にフレールベルのあの精神に還れ」と言いました。日本の幼児教育がその幼児教育の原点を忘
れ形骸化してはならないという警告です。日本のフレールベルといわれた倉橋惣三先生も、幼
稚園真諦の冒頭で「フレールベルの精神を忘れて、その方法の末のみを伝統化した幼稚園を疑
う」と言いました。フレールベルの偉大な功績は今日の幼児教育の原点として常に意識してい
なくてはならない基本なのです。

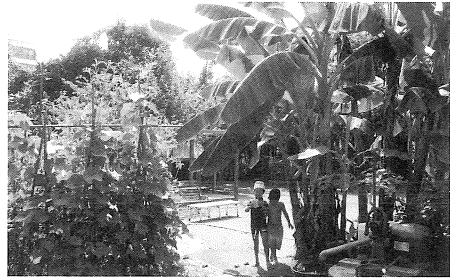
現在、日本には約一万三千の幼稚園と二万三千の保育園があります。なぜどちらも園とい
う名称が付いているのか、今一度考える必要があります。フレールベルは幼稚園に花壇や菜園
や果樹園をつくり、幼稚園にはそれらを必ず設置すべきと主張しました。私たちはここに着
目しなくてはなりません。近年の保育園は規制緩和が進行し、園庭が無くても近隣に児童公

園があればよいなどと認可の最低基準が大幅に変更されています。その結果、まるで宇宙船のように外部から遮断されたビルの中でも認可が可能になっています。児童公園を花畑や野菜畑や田んぼにすることは許されません。これをフレーベルの精神から考えると本当に園と言つてよいのでしょうか。既存の幼稚園や保育園でも同様のことがいえます。園庭があつても殺風景で硬く、花も木も植わっていない、平らで寂しく冷たい無味乾燥な園庭もあります。果たしてそれでよいのでしょうか。園庭を命の環境にする。それが食農保育です。

2 豊かな原風景を創造する

フレーベルは「人間教育の礎石がまず幼き魂の中に打ち据えられなくてはならない」と主張しました。間違いなく幼児期は人生百年を生きる土台なのです。

園庭も屋上も緑にあふれ積極的に食育・食農を取り入れ、豊かな温かみのある命の環境にあふれている保育園を取材した時の話です。ある日、十八歳くらいの女性が垣根から園庭をのぞいていました。畑作業をしていた園長が気付いて声をかけます。すると彼女は「園長先生！ 私居る？」と聞きました。園長は「居ますよ、中へお入り」と彼女を招き入れます。園の螺旋階段には創設からこれまでの卒園児の集合写真が貼られていました。彼女はじつと自分の写っている写真を眺めてから帰っていきました。それから二年後また彼女はやつて来ました。今度は赤ちゃんを連れてきます。そして告白します。実はあの時、自殺しようと思つてふらふら歩いていたこと。気が付いたら懐かしい園の前に立っていたこと。そして写真を見たら笑顔で写っている自分を発見したこと。それを見てまた生きたいと思つたこと。



そして今、結婚をしてかわいい子どもに恵まれて幸せになったこと。だから感謝の気持ちであいさつに來たと語ったのです。保育者は日々、子どもたちの心の中に原風景を刻んでいるのだという自覚を持たなければなりません。今、この瞬間にも子どもたちは刻んでいるのです。それは生きる力となります。どんな原風景がふさわしいか、もう一度目の前の園庭を見直してみる必要があります。

3 命は命からしか学べない

私は「命を大切にすることを育てる」ということが、保育・教育において最も崇高な根本原理であると考えます。命の尊さや創造性、そして自然への愛着や豊かな感性を育むために必要な体験として「生活の中で命とふれあい命を育てる」ことが必要であり、命を大切にする心の発達は「命とのふれあいの質と量に比例していく」とも考えます。人は命ある環境の中で育つことで、はじめて命と出会うことができます、命は命からしか学べないと考えられます。そのためには命の環境をイメージしてデザインしてつくっていくということが保育者には求められます。ロバート・フルガムは「人生の知恵は大学院という山のとっぺんにあるのではなく、幼稚園の砂場に埋まっていたのである」と言いました。どんなに室内の教育環境は優れていても、園庭の教育環境はどうですか？ 手が掛からない無味乾燥な園庭ではありませんか？ 園庭には命の環境がありますか？ 大型遊具やアスレチックで満足してはいませんか？ いくら摘んでも遊べるだけの草花が咲いて

いますか？ 園庭の文化がまだまだ未成熟な園は多いのではないのでしょうか。

4 園庭は総合芸術

世界にはそもそも庭園文化というものがあります。それは自然を素材にし、さまざまな思想や意匠が入り、それを庭園という形に凝縮した総合芸術です。幼稚園の園庭も同じではないのでしょうか。園庭は現代の日本の子どもたちに残された貴重な自然空間です。庭に出て花壇の花の香りを感じ、摘んで飾ったり、戯れたりしながら自由に過ごす場所が身近な生活の場で再生されることが、今の日本の子どもたちには必要です。従来 of 運動場、遊戯場という概念を超えて新しい文化を創造するのです。

日本では生活の中に自然をうまく取り入れてきた文化があります。それは春夏秋冬の旬の恵みに満ちていました。しかし現代の消費文化社会において、そうした日本特有の食農文化が失われています。人の生活には必ず食があり、食は農を経由します。生産が見えにくい消費中心の生活をしている現代の子どもたちにとって、保育を通して畑作（稲作）や調理など食の生産の方向に生活を広げることは、未知の生活を創造していくものであるといえます。

芸術はイメージして創り出すものです。それは日本の農家の庭先でもよいですし、お洒落な英国のガーデンでもよいでしょう。保育こそ総合芸術です。保育者一人ひとりが話し合い、命の環境をイメージして、命の保育をデザインすることが大切です。日本の未来は保育者のその手のひらに肉刺まめを作るかどうかにかかっているのではないのでしょうか。

（東京都市大学）

編輯顧問
倉橋惣三
と
キンダーブック

「乗物の巻」を読む

浜口順子

およそ半世紀ほど前、幼児だった私はキンダーブックとどこかで遭遇していた。『キンダーブック』の「キン」の音に金属的なひんやりした感触を覚え、題字のロゴのいわくありげな重厚感にはやや気押されるような印象を抱いたような気がする。とはいっても、幼少期の記憶というものは成長過程でいかにも改変されてくるものだ。当時そういう印象を実際に抱いたという確証はない。家で遭^あっていたのか、幼稚園の保育室で手に取っていたのか？

『キンダーブック』という幼児向けの教育絵本は、多くの方がご存じだろう。いや、私のように幼いころどこかで遭ったことがある、と思いつくものかもしれない。保育現場周辺に登場してから八十五年という長寿の定期刊行物。今も昔もフレールベル館から発行されてきた。その歴史のはじめ三分の一ほどにあたる二十八年間、この雑誌の編輯顧問を務めたのが倉橋惣三（一八八二～一九五五）である。彼は言うまでもなく、大正期から戦後にかけて、心理学、教育学の研究者として日本の幼児教育理論を牽引^{けんいん}してきた一人である（この『幼児の教育』誌も、その彼が長い間編集主幹を務め、研究の発信や現場啓発のツールとして活用した

雑誌である)。

一九二七(昭和二)年の創刊号は、和田實をはじめ、堀七蔵、河野清丸、岸邊福雄、そして倉橋らが賛助員として名を連ねていた。当時目幼稚園園長だった和田とフレール館の創立者高市次郎とが、幼児教育の教育教材開発に注いできた共同関係の上に、幼児の観察絵本を作ろうとしたのが発端である。^{注1}その第一集第一編のテーマは「お米の巻」。

「乗物の巻」から、編集体制が顧問・主任制となり、編輯顧問は倉橋惣三と岸邊福雄だった。^{注2}

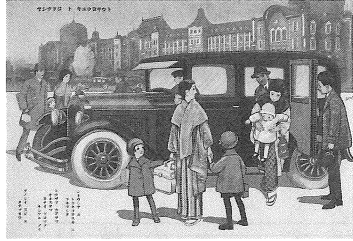
昭和に入り、世の中が大正期の童心主義的な子ども観から徐々に現実社会に適応する子ども観へと変化していく時代、倉橋は編輯顧問としてこの雑誌にかかわる。この連載では、その時代のキンダーブックを繰りながらいろいろと考えてみたい。

「乗物の巻」(昭和三年三月刊)

まず表紙を見てみよう。原本を手にしてこの表紙と対面した時、紙芝居を思い出した。横長の版もそうだし、この号の表紙の絵は特にストーリー性を感ずる。後続の号もストーリーがあるかというのと、そうではない。この号の表紙はいい、と素朴に思った。ぱっと見た瞬間は「線路のそばで子どもが遊んでいて危ない!」と思わされる。しかし、よくよく見ると……「ああ、大

きな木が倒れて線路をふさいでしまっているのだ。それを子どもたちが、迫り来る機関車に向かって、必死になって布を振って知らせているのだ」ということに気付かされる。思わず





引き込まれ、子どもの気持ちになり「それで、機関車はちゃんと止まったかな？」と表紙をめくると、中の一ページ目は、レンガの東京駅を背景に立派な黒塗りの自動車から降りる家族の図。ストーリー絵本ではない、と知らされる。左上に「トウキョウエキ ト ジドウシヤ」と書いてある。右から読む。当時のキンダーブックはカタカナの文字が多い。しかし同時代の幼児向け雑誌『コードモノクニ』ではひらがなも使っているから、当時の子どもはカタカナにもひらがなにも幼少期からなじんでいたのだろう。

ページごとに主題の異なる絵が続く。汽車に乗るまでの手順が示されるページ、蒸気機関車と電気機関車の全体像のページ。寝台車の内部が描かれるページには、

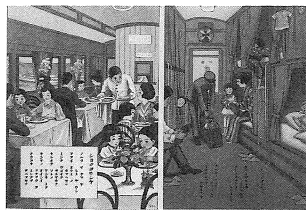
「セマイケレドモ オソウジガ キレイニデキタ シンダイシヤ

アシタノアサヲ タノシミニ ミナサンオヤスミ ナサイマセ」

といった、七五調を基本にした文がある。複数の文章が続くところは、たいていこうしたリズムミカルな文体になっている。

路上電車、自動車、自転車と人間がひしめき合うように行き交う交差点の図は、東京は銀座の交差点だ（昭和初期にもうこんなに混雑していたのかと、新鮮な驚きがある）。信号はなく、警官が赤と緑の旗を持って交通整理をしている。「ギンザ」という題名で、

「トマレ…ストップ ヒトモ デンシヤモ ジドウシヤモ オートバイヤラ ジテンシヤモ オマハリサンノ サシツニテ パツタリイチドニ トマリマス ビリビリ ビリー スス

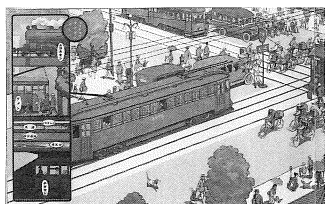
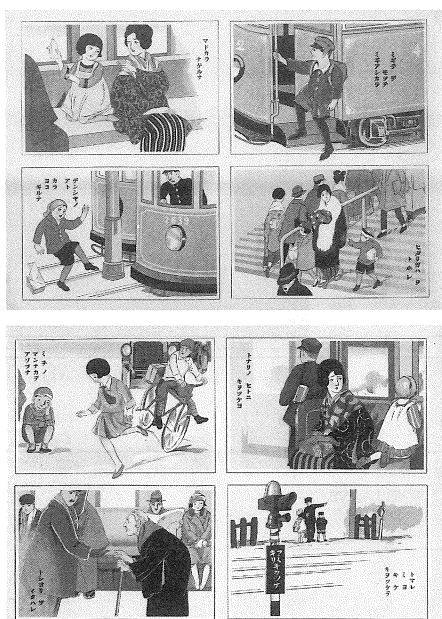


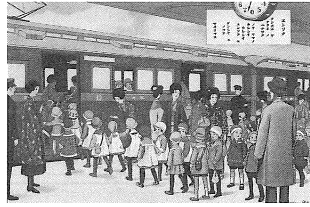
メ：ゴー チン チン ゴロ ゴロ ブー ブー シューシュー イチ
ドニ ドット ススミマス」。

その次のページには、「トウキョウヲタテニキレバ」という興味わく図解がある。縦長の図で、水平に幾層をなして、空中から地下にかけて文明の利器が横切っている。上から下へ順に「カウカセン（高架線・機関車が通っている）―デメン（地面・人と市電）―デンワセン（電話線・地中を通る）―ガースライドウ（水道）―ゲスイ（下水）―チカセン（地下線・現在の地下鉄。前年に現在の地下鉄銀座線が開通している）」と説明が入っている（括弧内、筆者）。これは、観察絵本には珍しい抽象的な図ともいえるが、少なくとも保育者（保姆や保護

者）の興味をそそるに違いない。

交通マナーのしつけを、二ページにわたり八コマに分けて描いているページ。「（市電に乗る際）ミギテ ヲモツテ ミギアシカラ」は、面白い。窓の方を向いて座っている女の子の足が自分の着物に触れるのを迷惑そうにしている婦人の図には「トナリノ ヒトニ キヲツケヨ」とある。お年寄りに席を譲る図は、今も昔も同じで「トシヨリ ヲ イタハレ」。「ミチノ マンナカデ アソブナ」という注意は少し懐かしいほどだ。「エンソク」のページでは、着物姿の保姆たちが、ホ





ームで園児たちを順番に電車に乗せている。大正末からのこの時代、倉橋はちょうど橋詰良一の「家なし幼稚園」を強く推奨していたことを思い出す。園の建物から子どもたちを連れ出して、自然や町の観察をさせることが増えていたのだろう。

「タンポポ ヤ ナタネ ノ ハナサク ノヤ ヤマノ ウレシイ ウレシイ エンソク ニ デンシヤニ ノツテ マイリマス」。

巻末「附録」として、一層きれいな色刷りの図版「二寸法師お碗の舟」

がある。確かにこれも「乗物」だ。編輯後記に「今回から附録には、印刷技術の粋をこらした芸術絵を差上げます。御子様方の御部屋が追々新しい美事な絵画で飾られるでせう。御期待下さい」とある（後の号で、この附録が好評だったと報告されている）。この絵も含めてこの号の絵はすべての場朝二の作であるが、芸術性、写実性、情緒性等豊かに統一されている感がある。

巻末に「本誌のモットー」、

○児童生活の「心の糧」

○絵画を以て編まれたる連絡あり統一ある幼児読本

○理知と芸術の交響楽

とある。最初の「心の糧」については、注釈が解説ページに次のように書いてある。

「児童期に於いては世人が往々信じている様に、とかく空想にのみ馳するものではなくして、



現実の自然と人事——即ち目に見、手に触るる自己の環境——を凝視し、探究し、驚異しつつ、自己の内的生活を拡大していくのである。かかる時期に児童の要求する真の「心の糧」は徒なる想像や夢幻ではなくして、むしろ事実であり科学である」。

保育項目「観察」を実践する上で、キンダーブックという教材が持つ効果は限られたものだ。もとより、子どもが観察対象とするのは生活全体である。しかし、保姆や保護者たち大人が「観察」で探究されるべき事実、科学とはどのようなものかを考えるヒントを得て、子どもたちと一緒に面白がって「見る」体験をし、日常生活にその視野を拡大する教材には確実になり得ていると思う。一方で、紙のテキストしか持ち得ない強みというものがあるに違いない。「絵」という二次元の表現（メディア）を子どもが享受する経験について考えていきたい。—— 続く ——

（引用文は、一部現代仮名・文字遣いに適宜書き換えた。）

（お茶の水女子大学大学院）

注

1 『フレーベル館一〇〇年史』二〇〇八年 p.47。大正十五年の幼稚園令の發布により「観察」項目が加わったことが契機になって企画された。

2 編輯顧問 倉橋惣三・岸邊福雄（編輯主任 高市慶雄）、絵画顧問 清水良雄（絵画主任 的場朝二）、童謡顧問 西条八十（童謡主任 千葉省三）、童話顧問 巖谷小波、作曲顧問 小松耕輔（作曲主任 小松清）。倉橋と共に編輯顧問を務めた岸邊福雄は、東洋幼稚園の園長で、クレヨンやヒルの大型積み木を日本で初めて導入するなど、保育環境を積極的に改革し広く保育現場に影響を与えた。賛助員には和田實らが創刊号から引き続き名前を連ねている。

報告

「いのちはみんなつながっている」知識より知恵を」

本橋成一氏（映画「ナージャの村」監督）講演

～第二回 お茶の水女子大学ECCCEL子ども学シンポジウム
「今、子どもが育つ環境を考える」(二〇一一年十一月十九日) から～

菊地知子

お茶の水女子大学ECCCEL^{注1}では、二〇一一年十一月十九日に第二回子ども学シンポジウムを開催しました。前半は写真家であり映画監督である本橋成一氏の講演、後半は、教育社会学の立場から小玉亮子氏、小児科学の立場から榎原洋一氏によるコメントと本橋氏による応答がありました。ここでは、本橋氏によるお話の一部をご紹介します。以下、第二回子ども学シンポジウムお知らせの文言です。

今回の震災で私たちは、あたりまえに続くと思い込んでいた「日常」が失われ分断され得ることを改めて知りました。その中で、幼い「いのち」をどのように生かしていけばよいのでしょうか。はるか先の時代まで持ち越し、

未来の子どもたちに背負わせることになってしまった目に見えないものに対し、私たちは自覚的に、今ここへのまなざしだけではなく世代性を含めて考えていかなければならないと思います。チエルノブイリの事故をどこか遠い国の、関係ない話だと勘違いできなくなつた今、三月十一日以降の、子どもという存在や子どもを取り巻く社会の今後について、本橋監督のお話から皆で一緒に考えていきましょう。

菊地（司会） 本橋さんは、チエルノブイリ原発事故で放射能に汚染され、政府の立ち退き要請で地図から消えた村で素朴に暮らし続ける住民を描いたドキュメンタリー映画「ナージャの村」や「アレクセ

イと泉^{注2}」を撮られた監督さんです。どちらの映画にも人間だけでなく動植物いろいろな生き物たちも出てきますし、息を呑む^のような美しい風景もたくさん出てきます。今回の原発事故で私は改めて、モノやお金、利得や便利さ快適さを求めるあまり、子どもたちや若者、加えて、動物や草木、すべての生き物にすまないことをしてしまった、という気持ちがあります。私たちは今日、「いのちはみんなつながっている」知識より知恵を」という副題で本橋さんのお話をお聞きます。どうぞよろしくお願いします。

本橋 今日まずお話をしようと思うのは、一九八六年に起こったチェルノブイリ事故のこと。私がチェルノブイリに最初に行ったのは事故があつた五年後です。僕は写真家ですが、報道カメラマンではないので、すぐ行ってすぐ撮るというのが得意ではない。早く行ってみたいという気持ちはあつたんですけど、なかなかすぐには行動に移せず、一九九一年の春に、信州大学の医学部のお医者さん、小児科とあとは甲状腺の第二外科、その先生たちに同行する

ことになった。最初に案内されたのは、あの石棺といわれる、事故の起こった4号炉なんです。バスで案内されて見学ができるようになっていたんですけど、案内の方は「安全ですから、安全ですから。ご安心ください」としきりに言う。その割には「ここには5分だけ」と制限する。そしてカメラバッグを置こうとしたらものすごい勢いで怒られたんですね。安全だということにどういふことなだろうと。それで、お医者さんのお一人が、測定器を持ち込んでいて、スイッチを入れたらすごい音でピーピーピー鳴りだした。それまでは、のどかな初夏の日で、ああ本当に事故が終わったのかな、という気になったのですけれど、スイッチを入れた途端にピーピーピーものすごい鳴る。よくいわれますが、放射能っていうのは痛くもかゆくもない。ただ、あの音だけがすごく怖かったですね。

次に案内されたのはベラルーシという国。チェルノブイリというのはロシアとベラルーシとウクライナとの、ちょうど国境のそばなんです。それで、

ベラルーシのゴメリ州という所が、事故のあった原発から一八〇キロ離れているのに高汚染度になってしまった場所で、その州立病院の小児病棟に、放射能による障害が起きた子どもたちが集められていました。抗がん剤で本当に苦しい思いをしている子どもたちがベッドに横たわっていて、僕が先生に案内されて入っていくと、本当に一生懸命起き上がってニコツと笑って歓迎をしてくれるんですね。それがとってもつらくて、やっぱり自分たち（先行世代）のせいでこの子どもたちをこうしてしまった、つまりおじさんたちが豊かになろうとしたそのつけが、全部その子どもたちにいつてしまった。本当にごめんなさい、という思いで、こういう子どもたちを僕には撮れない、だから僕はもうここに来るのはやめようと思ったんですね。

そして最後に案内されたのが、ゴメリ州の中でも僕の二つ目の映画の舞台になっている地域です。信州大学の先生たちが、その小さい病院に四日か五日滞在するのでついに行った。僕は写真を撮ろうと

いうよりも、何か手伝いたいと思って、白衣を借りて行ったんですけど、何もできることがなくて、そうだ、この村々だったら写真が撮れそうだなって思っただけです。というのは、四月で、真っ白いリンゴの花が満開だったんです。そしてちょうどジャガイモの植え付けの時期で、汚染されている村もそうじゃない村も、都会から子どもたちが戻ってきて、皆、農作業の手伝いをしていました。日本人に会うのは初めてということで、見かけると家の中に招き入れられて、あつという間にごちそうが出て、サマゴンという自家製ウオッカを出され、言葉もほとんどろくに通じないのに何だか盛り上がって、それを一日三軒くらい呼ばれて行く。信州大学の先生たちが、今日は何十人診たとか、あの子はすぐに治療しなきゃだめとか、皆が相当疲れている中で、ごちそうやお酒を振る舞われた話はできなくて、結局もう二度とこの地域には来ないだろうと思っていたら、三か月後にはまた行っていたんです。娘の結婚式だから写真を撮りに来てくれとか、溶接棒がないから持ってきて

てくれとか、心臓があまりよくないから薬を持ってきてくれとか、そういう注文をたくさんもらった。それがきっかけにはなったけれど、僕がそこに通いたくなつたのはなぜかと一言で言う、「いのちが見えた」というようなことだった。チェルノブイリの悲惨さはテレビや雑誌でさんざん紹介されていましたが、僕は、彼らの暮らしを見て、悲惨さというよりも彼らの「暮らし」を撮れたらいいなと思ったんです。フランス人の僕の友達が僕の写真集を見て、これはフランスの百年前、いや二百年前の風景だな、と言ったくらい、時代遅れというか、本当に素朴な暮らしをしているんです。だけど一つひとつを見ると本当にちゃんと命と向き合って暮らしている。後に知ったんですけれども、チェルノブイリの原発の6割から7割は輸出用だったんだそうです。輸出用のドル稼ぎの発電所だった。福島原発も東京で使う電力のためですね。本当に皮肉なことだと思えますよ。村のどの家に訪ねていても本当に素朴で冷蔵庫など家電製品は本当にない。電気なんかほと

んど使っていない。車もない。でも彼らは決して自分たちの暮らしは貧しいとは思っていないんですね。そこがすごいんです。その後十数年通ったわけですから、その間にソ連が解体してロシアもベラルーシも経済発展し、あつという間にどんどん物が入ってきましたが、ともかく僕はそこで、こんなまともな暮らしがあつた、というのを見た。

映画の舞台となつた村には、数えてみたら四十回くらい通つたと思います。その暮らしがなぜそんなに僕を惹きつけたかというと、僕は敗戦の時、五歳で、戦後の貧しい暮らしというか、物が無いシンブルな暮らしの中で育つた人間です。それで余計に、何か彼らの暮らしというのが見えたと思うんですね。その後、一九六四年の東京オリンピックをピークにどんどんどんどん物質、モノの文化に変わっていった。物質的に豊かな文化を得るために、何かもう一つの豊かさを失っていった。そういうことがずっと僕の写真のテーマになっていると思うんです。

3・11の時に僕が一番思ったのは、自分たちの暮

らしをそろそろマイナス計算で考えないと、このままで持続するわけではない、ということですよ。たとえば東京―大阪間を新幹線で2時間を切ることばっかり考えていたけれど、もうそろそろ2時間じゃなくて3時間10分でもいいんじゃないの、というふうな計算をしていくことが一番肝心なことじゃないかと思ってるんです。

産業革命で動力というものができたことによつてたとえば低い所から高い所に水が流れるようになった。そうすると、食べ物が採れず住めなかつた場所にも人間が住めるようになってしまった。でも本来そこには他の命を持っているものがたくさん住んでいたわけですよ。そういうものを追い出したり、殺したりしながら人間だけが増えていった。距離も動力によつて短くなったから、あつちのものを売つてきて食えるようになったり、こつちのものを売ることができたりして、あつという間に人口が増えていった。だからこそ僕とか皆さんもいるわけですけど、もうそろそろ本来の姿に戻していかないといけない

と思ふんです。

「アレクセイと泉」の時に僕は水のことを気になつて、いろいろ読んだり聞いたりしたんですけど、アレクセイの村でじいばばたちに、どうして村から町に出ていかないのか聞いたら、一番の理由は命をお返しする時に、この村、この泉にお水を返せないから嫌だよつて言うんですよ。水を借りている、借りている水を返しに行けなくなるから嫌だ、と。それがすごいなつて思つた。人間7割は水なんだそうですね。体重が五〇キロの方だったら三十五リットルも持っているわけですよ、皆。命がなくなつたら皆返すわけです。あるテレビ番組で言つていたんですけど、生き物たちが借りられる水は地球の中の水の0.003%から0.006%しかないんだそうです。だから世界の人口が西暦二〇八五年に八十五億人以上になつた時に、その水が足らなくなつてくるつて言つてたんですよ。(現在)七十億人ですからね、あと十億増えることは簡単なことですよ、いい増え方をしなきゃいけないんだらうなと思ひますが、た

たとえば太陽光パネルでも、山や野原や海の上に敷き詰めればその下にいる生き物たちの生きる場所をなくす。そして人間の都合でいづれゴミになるものを生み出して残していいたら、若い人たちは大変だろうって思うんですね。僕らがつくったものを全部君たちにお願います、とたくさん残していくわけで、それに対しては本当に、（若いこれからの人たちが）本気で怒っていいんじゃないかって思います。

結婚式にも、出会えば必ず招待されて、たくさん出てきました。だけど事故当時の子どもたちが二十歳過ぎて結婚して出産の時期を迎えると、皆、いろんな心配事を抱えて産婦人科にやって来る。実際に放射能のために流産するというようなこともないことはないんだけど、半分は精神的な面ですよ、それで出産率が低下する、ということを取材しました。今回の東北でも、今小さい子どもでも十五年後二十年後子どもを産むようになっていく。その時までずっと今ここでのことを引きずっていくわけですからね。どうやって皆でケアしていくか。そういう問題

がこれからたくさん出てくるでしょうね。

このままモノを増やすとか時間を短縮するというのは豊かさを求めるのではなく、そろそろマイナス計算をやっていく。そして気持ちはプラスにしていこう。ナージャって、ナジェージュという女の子の名前の通称なんです、ロシア語で希望という意味なんです。よね。たまたま、ナージャの映画だったんです。そういう希望、夢を皆でちゃんとつくり出していけるように、今日は若い方がたくさん来ているので、ぜひ、僕らおじさんおばさんにできることを一緒にやっていけたらいいなって思っています。

（お茶の水女子大学）

注

- 1 Early Childhood Care/Education & Lifelong Learning
「乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築事業」の略称で、平成22年度より6か年計画で推進される特別経費による教育研究プロジェクトです。乳幼児、学生、社会人が共に学び自らの成長を探索する場の創造を目指しています。

- 2 本橋氏の作品については巻末「ひろば」欄参照。

報告

保育におけるリーダーシップ論

— 今、世界で語られていること —

井上知香

フィンランド、タンペレへ

二〇一一年十月にフィンランドのタンペレ大学で開催されたILRF (International Leadership Research Forum)^{注1}に参加する機会を得ました。タンペレ大学幼児教育学科のEeva Hujala教授が中心となり、その長年の研究テーマである幼児教育におけるリーダーシップについて共に考えていこうとする仲間を世界各国から集め、考えを共有したいと開催した第一回のフォーラムでした。Hujala教授に加え、Julian Rodd氏(イギリス)、Manjula Waniganayake教授(オーストラリア)らが中心となりながら、参

加者からもさまざまな意見が交わされ、多様性が受け入れられるオープンな場でした。

タンペレは、首都ヘルシンキから北西へ一七〇キロほど北上したところにある湖に囲まれた街です。紡績業で発展したという歴史を持ちますが、現在でもNOKIAなどのIT産業またそれに関連する産業が盛んな街です。またタンペレ大



▲タンペレ(秋)

学のほかにも高等教育機関が集まっていることから学生の街でもあります。若者が親元から離れて移り住み、初めて自立して学ぶ場として選ばれる街として人気もあると聞きます。そのような地において、幼児教育におけるリーダーシップという、世界的にもこれからの研究がまたれている分野の先駆的な会が設けられたことに、何かの巡り合わせを感じずにはいられませんでした。

リーダーシップ？

日本においても、書籍、講座、ワークショップ等のテーマとしてリーダーシップという言葉が聞かれ始めてから久しくなっています。リーダーシップについては、産業界や大学界とさまざまな分野領域をまたいで、その特性や要素を明らかにしようとした議論が多く展開されてきているといえるでしょう。リーダーシップ論に直接かわらないまでも、紙面やインターネットなどから発信される情報にはリーダーシップを問う声が多く見られ、多様なリーダー

シップ像が表現され展開を見せています。このような背景には、組織や共同体のトップに立つ人に対して、何か正解のある、形をもった強いリーダーシップ像を追い求める人々の姿があるようにも映ります。

わかちもたれた……

今回のILRFでは、行政クラスにおけるリーダーシップについて、保育者養成大学におけるリーダーシップ養成プログラムについて、現場の園長また保育者の役割についてと、幼児教育におけるリーダーシップ研究を進めてきた研究者の方がさまざまな立ち位置にあり、その成果を発表されました。保育におけるリーダーシップ研究は、途についたばかりのものであり、これからの研究(exploration)がまたれる新しい分野であることが参加者皆さんの共通認識としてありました。ですので、さまざまな議論が歓迎され、リーダーシップとは何かを原点に戻り問うことから始まり、そもそもリーダーシップの定

義はなされるべきか、もしくは多様性があるのだとする方向に議論がなされるべきかといった意見が出されるほどにその場は開かれているものでした。

発表の中でもとりわけ関心を集めていたものが「distributed leadership」という概念です。訳すならば、「わかちもたれたリーダーシップ」となるでしょうか。これはリーダーシップの特性や要素を問うミクロな視点のものではなく、リーダーシップそのものの概念を問い直すというアプローチを試みるマクロな視点を持つものです。この概念を教育の場において取り入れたSpillaneらは、望ましいリーダー像という写真を表す概念ではなく、「この枠組みを知ることによってリーダー自身が実践を振り返る一助となれば」ということを語っています。具体的には、リーダーシップとは個人やリーダーの行為ではなく、リーダーとフォロワーのインタラクションによって成されるものである、というのがdistributed leadershipの説明としてなされています。『Let's do it together!』『一緒にやってみましょう!』

というものだという説明がこの概念を援用して研究を進める発表者からなされていました。

保育の場においては近年になり、このdistributed leadershipという概念に関心が集められ、保育としてのとらえを見いだそうとする動きが出てきているということです。人と人との親密さや柔軟さ、多様さに重きを置き、協同的に営まれる保育を、従来企業内で求められてきたトップダウン的で階層的、均一的に行使されてしまうリーダーシップの枠組みでは語り切れないという限界から生まれ、新たにもたらされた概念だといえるのではないのでしょうか。

保育の中でどうつなぐべきか

今回のフォーラムの中では、リーダーシップとは人から教えられて学ぶものであったり、誰かからもたらされるものではなく、その場にいる中で自然と湧き起こってくるものであるという主張や、個々人が自分なりのリーダーシップの意味を発見していかなければならないという意見が聞かれました。また

この主張は、Hujala 教授がその論文で述べた次の一節にも通ずるものです。

Leadership as an interpretive phenomenon means that it is not only the leaders' own ideas concerning leadership but also the views of all those involved with childcare, including the families and stakeholders, that define leadership in childcare.

(リーダーシップとは読み解かれる現象である。すなわちリーダーシップとは、リーダー自身が発想するだけのものではなく、家族や関係者といった保育にかかわるすべての人たちの見方も含まれるのである)。

このことは、リーダーシップというものは、リーダーが一方的に発揮したり、集団をまとめたりするといったものではなく、子どもを取り巻き人々が集う場の中で、起こり得る事象にその都度応答してい

こうとする時に生じてくるものであるということを指し示しているのではないかと感じます。

リーダーシップに対して形を求めるイメージやあり方とは異なり、保育に開かれているリーダーシップはどこか柔らかさを持つものであり、私たちに託されているものだと感じることとなりました。



フォーラムの最終日には、研究としてのどのような視点がこれから必要かといったことを小さなグループに分かれて話し合うワークシヨップが開かれました。

あるグループでは、議論が白熱していく中で「でも僕たちは子どもと一緒に生きているからね」との、ふと間をつくようなある一人の方からの発言があったといいます。自ずと「大人」に焦点が当てられていくような議論の中で、「待って、私たちはどこに誰と生きている？」と問いかけてくれる、忘れられない静かな言葉であると感じました。

(お茶の水女子大学大学院)

1 注

ILRFのホームページからは、フォーラムの概要、当日のプログラム、参加者のアブストラクトを見る事ができます。

<http://www.utafj/edu/en/ilrf/index.html>

2

訳にあたり、Distributed Intelligenceの訳として用いられた「わかちもたれた知能」を参照しました。

3

Spillane, J. P., R. Halverson, and J. B. Diamond(2001): Investigating school leadership practice:

A distributed perspective, Educational Researcher, 30.3, 23-28

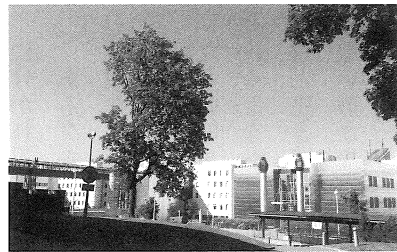
4

Eeva Hujala (2004): Dimensions of leadership in the childcare context. Scandinavian Journal of Educational Research, 48.1, 53-71



▲町の中心地の全景(冬)

～タンペレの美しい風景～



▲タンペレ大学(春)



▲樹氷と凍りついた湖(冬)



▲町の中心を走る大通り(夏)

1 7 28
幼児の教育
110年の散策
56 109 110

阪神淡路大震災関連の記事から

― 第九十六巻第一号（一九九七年一月）より ―

菊地知子

一九九五年一月に起きた「阪神淡路大震災」の後、幼児の教育では、一九九五年九月から二〇〇〇年一月まで、「震災後の子どもたち」と題する記事をシリーズ化し、後半は断続的ながらも、回を重ねること二十四回に及んだ。そのラインナップは多彩で、幼稚園、保育園における幼い子どもたち、あるいは学童クラブでの小学生の状況にとどまらず、学童クラブに端を発して組織されたボランティアグループ、フリースクール、本屋さんなどの手になる、中学生高校生に触れた記事が存外多いという印象がある。それらどの記事も実に捨て難く魅力的なのだが、以下に、四日市市にある子どもの本の専門店「メリーゴーランド」の店主、増田喜昭氏による記事を見ていきたい。

震災後の子どもたち(13) 中学生とボランティア（一九九七（平成九）年第九十六巻第一号）

増田喜昭（子どもの本の専門店メリーゴーランド）

その日は土曜日だったので、僕はてっきり学校は休みだと思っていた。神戸にボランティア

アに行く人を探していたとき、中学生四人が行きたいと申し出たので僕は「そいつはすばらしい、いい経験になるぞ」と喜んで、彼等を仲間に加えたのだ。

(中略)……希望者も多く、とりあえず中学生以上はOK、ということにしたのだが、その土曜日は学校のある日で、さっそく校長先生から電話でおしかりを受けることになった。それは、二次災害があったらどうするのか、またその責任は誰がとるのか、といった内容で、立場上、校長先生は許可することはできないことはよく理解できたのだが、子どもたちのその気を変えることはできないので、結局ずる休みということにして出発したのだ。

その日は、車四台で焼そば三百人分(材料は細かくきざんでビニール袋などに入れてある)、それと、市の女性課が集めてくれた、生理用品と下着千人分をつみ込んだ。

金曜日の夜、集まった中学生たちのいでたちを見て、僕たちは笑ってしまった。寝袋に着換えなど、まるでキャンプにでも行くような重装備だったのである。そのときもうすでに車の中は救援物資でいっぱい、個人の荷物はじやまになるほどだったのだ。

何が必要か必要かは、行ってみて体験しないとわからない。まあいいか、ということで、荷物にうずまった中学生たちを乗せて出発した。

途中、カーブの多い天理の山道で、大量の生理用品が彼等の頭の上にドカドカツと落ちてくるというハプニングもあったが、どうにか目的地に着いた。

そこはもう、あわただしい所で、大学生のボランティアや全国から集まった人たちが、てきぱきと昼、夜なく動き廻っていたので、誰も中学生にかまっている余裕はない。

(中略)僕はこの二日間の中学生たちを見ていて、正直、一日目は、連れてくるんじゃないかつ

た、と思うことも何度かあった。やっぱり、自立していないやつはダメだ、と想ったりした。しかし、ひとたび、誰かに喜んでもらえるという実感を持った彼らは驚くほどキビキビと動き出したのだ。

これは、学校や日常生活では味わうことのできない、生きたナマの体験なのである。人が人として人と関わりながら生きるという単純な実感を、ひよっとすると彼等は今まで一度も味わったことがなかったのかも知れないのだ。

予定通りの、時間割通りの、学校と塾とクラブ活動の日々の中では感じるこのことのできなかった何かを感じたのではないか。

神戸の仲間たちは、中学生四人にむかって、「お前たち完全にはまったな」と言った。それは、他人に喜んでもらえたという実感のことを言うのだ。「残りたい」「また来たい」と口々に言う彼等を見ていると、まさに、はまった、と思えるのである。

ボランティア、と言えるほど大したことをしたわけではないし、ほんとにささやかな行動であつたのだらうけれど、確実に、彼等の中に残つたものはある。

行動しながら考え、考えながら行動すること、それは教室で机の前でコツコツ勉強すること以上に大切なことなのかも知れない。

幼い頃から、文字や数字を憶えさせることに熱心になっているうちに、行動しながら考える、遊びながら学ぶ、地域のことを考える、助け合つて生きる……そんなこんなを、体感することを忘れていくのではないだろうか。

子どもたちに、もっともつと街に出て遊んでほしい……。そんなことを、中学生と神戸へ

行ったこと（を）思い出しながら考えている。

中学生も一人の市民、社会の仲間

中学時代のことを、「刑期三年恩赦なし」と、体制としての学校を批判する恩師がいた。言語障がいのある臨床家として、学校という、往々にして特殊コードしか通用しない場で「痛い思い」を余儀なくされている子どもたちとのつき合いが深かったからで、教師や、ましてや児童生徒憎しでは決してなかったことは付け加えておきたい。何にせよ、学校外に、中学生らの居ていい場所がそれなりに心地よく用意されているかといえば、大方の大人は諾という自信がないのではないかと思う。つき合うに面倒な年代だから学校という閉じられた空間で高校受験のための勉強と部活動となけなしの行事だけにその力を注いでいてくれ、満足していてくれ、社会参画はごめん被る、という、ある種の暗黙の排除がありはしまいか。

今般の大災害で、たとえば、避難する道中、防災マニュアルにはない多少の回り道をして近隣の保育園に寄り、園児をおぶって避難した中学生たちがいたことを知るだけで胸が熱くなり、人間は本当に捨てたもんじゃないのだと励まされる。社会があらゆる世代を巻き込んで再生しようとし、力を貸してほしいと願うことと、ここには君たちの居場所もあるのだ、と確認し伝達するということは、同時に起こり得るように思う。

三月十一日を経た私たちにとって、彼らのことも排除することなく巻き込み、頼り頼られようという人心に、小さくはない希望が見えることを、阪神淡路大震災時の複数の特集記事から改めて確認したように思う。

（お茶の水女子大学）

子ども学の

ひろば

本橋成一監督作品

『ナージャの村』1997年 日本・ベラルーシ 118分
『アレクセイと泉』2002年 日本 104分
DVDツインパック (紀伊國屋2011)

いずれの作品も、1986年チェルノブイリ原発事故後、放射能に汚染され、強制移住地区や避難勧告地区になり地図から消えたベラルーシ共和国の村に住み続ける人々の暮らしを描いたドキュメンタリー映画です。

「いのちの大地の物語」とパッケージにある通り、美しく豊かな自然とその中で素朴に暮らす人々が、息を呑むような美しい映像で綴られています。豊かさとは何かということを見る私たちに問いかけます。

本橋成一氏の作品は他に写真集、絵本などがあります。(K)

<http://polepoletimes.jp/times/shop/motohashi/>

● 取材こぼれ話 ～編集部～ ●

「私は記録係として何度かインタビューに立ち会わせていただきました。その際、お話に惹き込まれ、気付くと記録する手が止まっている瞬間がありました。手を止めてゆっくり考えたいような深いお話をいつも聞かせていただいています (RK)」。

……このコメントを寄せてくれたKさんは大学院生ですが、座談会やインタビュー取材の時には、PC打ち込みやテープ起こしをたびたびお願いしてきました。編集部の欠かせない助っ人の一人です。(H)

松野クララ顕彰碑のお知らせ

顕彰碑建設募金活動が実り、青山霊園外人墓地(松野家の墓地内)に顕彰碑を建設、昨年11月3日に除幕式を行いました。大きな松の木が目印です。お近くにいらした際はどうぞお立ち寄りください。



顕彰碑建設の記録を作成しました。津守真先生など除幕式参加者の言葉やクララの資料を掲載した貴重な記録です。

1部1000円でお分けします。ご希望の方は、お茶の水女子大学附属幼稚園 (03-5978-5881) まで。

絵本の紹介

「ぶた にく」 大西暢夫 幻冬舎 2010年

「食べる」とは何か。「生きる」とは何か。

生命のサイクルを巡る問いが読者に迫ってくるドキュメンタリー写真絵本。舞台は鹿児島市にある知的障害のある人たちの福祉施設「ゆうかり学園」の豚舎。学園の豚は、学園内や近隣の学校の残飯、学園で育てている低農薬野菜などを飼料とし、配合飼料は一切使用しない。そのため生育期間はゆったりと長くなる。その間、豚たちは利用者になつぱりと愛されて育つのだという。おっとりとした穏やかな豚たちの表情は、3年間豚舎に通って撮影に取り組んだ大西カメラマンのまなざしと重なって見える。さて、心を込めて育てた豚がやがて学園内で豚肉になり、ソーセージ等に加工される。その現実に向き合うひとときを、静かに子どもと共有していただければ、と思う。(S)

エピソード

園庭にしゃがみこんだ子どもが見つめる先には小さなアリ。新学期、よく見る光景です。自分より小さいものに出会って心を動かしている姿。新しい環境の中で不安を感じつつも地面をしっかりと踏みしめて一歩踏み出そうとしているように見えます。

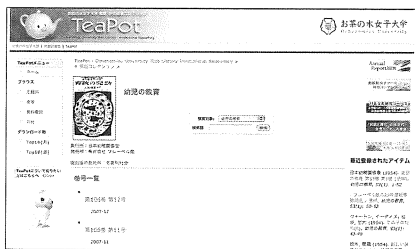
昨年の震災から一年。南三陸町の知人から、いったん途絶えた家業を再開したとの知らせがありました。前向きな姿勢に私も励まされる思いです。季刊誌になった本誌も二年目に入りました。これまでの積み重ねを大事にしつつ、新しく進んでいけたらと思います。

本橋先生のお話に「ナージャ」は「希望」という意味であるとありました。希望を感じる春。芽吹く、生まれる、生きる。力を感じる季節です。(Y)

幼児の教育 バックナンバーをWEBページで公開中

「幼児の教育」または「TeaPot」で

検索



<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/handle/10083/3705/bulletin/>

明治34年発行の創刊号から、現在、平成20年発行の第107巻までご覧になれます。

なお、自由投稿、「ひろば」への情報などもお待ちしております。
nyuyoji-info@cc.ocha.ac.jp まで。

次号予告 幼児の教育 夏号 2012年6月刊行予定

新企画も好評！ 充実した内容でお届けします。

特集 問い直そう、保育の中のあたりまえのこと6 - 「遊び」と「学び」 -

シリーズ 子どもが育つ場所を訪ねて - ふれあいの家 おばちゃんち(東京都品川区) -

報告 子ども学シンポジウム - 現代の保育制度変革の中で起こっていること -

※タイトル・内容が変更になる場合もあります。

幼児の教育 春号 第111巻 第2号

平成24年4月1日発行

編集発行人/浜口順子

編集担当/田中恭子

発行所/日本幼稚園協会

〒112-8610

東京都文京区大塚2-1-1

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発売所/株式会社フレーベル館

電話: 03-5395-6657 (編集)

振替/00190-2-19640

印刷所/図書印刷株式会社

定価/750円(本体715円)

©日本幼稚園協会 2012 Printed in Japan

編集協力/フレーベル館

編集スタッフ/伊集院理子

菊地知子

佐治由美子

宮里眺美

吉岡晶子

● ご購入のお問い合わせは、フレーベル館までお願いします。03-5395-6613 (営業) ●

保護者との
やりとりが
楽しくなる!

イラストでわかりやすい 対応事例集



どうする? こうする!
これで安心 保護者対応

松田順子／著
(東九州短期大学 特任教授)

定価1,785円(税込)

23×18cm 128ページ 10929

Point ① Q&A形式

明日から役立つ
対応がわかる!

Point ② イラスト

具体的な事例を
楽しく紹介!

Point ③ ポイント解説

園での注意点が
わかる!

【内容】

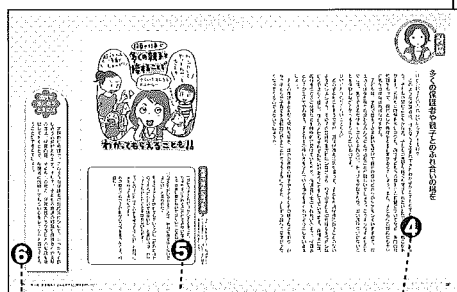
第1章 いろいろ! こんな保護者～保護者のタイプ別対応法

第2章 あるある! こんな子どもに関するやりとり

第3章 保護者自身の問題に向き合う

第4章 園の方針や体制への要望に対応する

あなたの悩みを解決する⑥つの構成



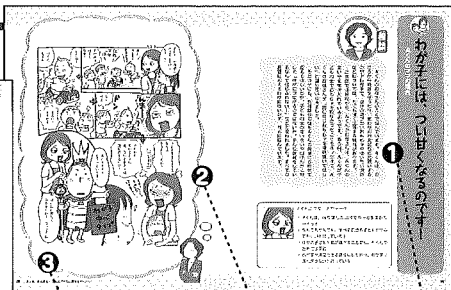
⑤ どうする? こんな例
現場から届いたその他の事例

③ マンガ
相談内容のマンガ

① 相談
具体的な保護者対応の相談内容

⑥ 園内で話し合うときには
園で対処する際のポイントを紹介

④ 対応
注意すべき点や対処法を解説



② 人物データ
相談内容の保護者のデータ

子ども・保護者
との関係づくりの
特効薬！

保育がもっと好きになる 22の素敵なエピソード



子どもの見方が変わる みんなの育ちの物語

井桁容子／著

(東京家政大学ナースリールーム主任)

定価1,575円(税込)

19×15cm 112ページ 10930

効能①

発達理解

子どもの見方が
変わり、保育が
もっと充実する！

効能②

信頼関係

保護者に信頼
される保育者に
なれる！

効能③

自己成長

受け入れることで
自分にも人も
優しくなれる！

【もくじより】

- はじめに
- ナースリールームへようこそ
- 子どもってすごい！
- 困ったトラブル???
- 親も子も育つ時
- 子どもがうれしいこと
- いたずらの意味
- 子どもと一緒に成長
- おわりに

講演会受講者の声

今すぐ子どもたちに
会いたくなりました
(30代・保育者)

私も言葉で
伝えられない乳児の
気持ちを汲み取りたい
(20代・保育者)

ほんわかと
肩の力が抜けて、
心が豊かになりました
(40代・母親)

保護者の成長を
認めてくれる
保育に感動!!
(30代・父親)

エピソードの一例です。続きは本誌にて！

episode 1

子どもってすごい！

風邪で口内炎になった智香ちゃん。痛くて口に入れた食事を吐き出し、しばらくすると「鼻で食べた！」と鼻の下にニンジンベタツ。続いてニヤリとして「おめめから食べる！」と切干大根を脛に。3歳児のユーモアに脱帽です！

episode 2

かみつきをトラブルにしない

友達の腕をかんてしまった浩介くん。お迎えに来たお母さんは顔面蒼白。容子先生が止められなかったことを詫び、「浩介くんはやさしい子に育つと保証します」と伝えると、お母さんは心が緩んで涙ぐみ、浩介くんを抱きしめました。

episode 3

ゆっくり育ちに付き合う

バジャマで登園したい太一くん。絶対阻止したいお母さん。朝の“ケンカ”が絶えない親子が、容子先生の助言で変化！育ちを面白がることを学んだお母さんに見守られ、太一くんはいろいろな体験ができてとても幸せです！

episode 4

そのままで二重丸！

もうすぐ妹が生まれ、お兄ちゃんになる漉太くん。お兄ちゃんに対する周囲の期待が大きく、少し不安そうです。容子先生が「そのままでいいのよ」と魔法をかけると、のびのびと自分を表現するようになった漉太くんでした。